

疑へないもの

山田次郎

知性の具體的態度としての疑ひ。——疑ひの背後をなすものとしての疑へないもの、自我。——疑ひの前方に立つものとしての疑へないもの、實在。——實在の矛盾的性格とその反映としての知性の無限の自己顛倒、その種々相。——
實在の自我性と自我の非自我性、疑へないもの、辨證法的性格。

一

「凡ては流れる。」直接具體相に於ける一切有として、生はまことに不斷の流轉である。併しこの事にして眞實であればある程、かゝる認識そのもの、立場は却つていはゞ虹のやうにその上に不動であるとも云ひ得なければならぬ。不斷の動搖と不安の中にあつて、生は或時自己を根本的に「觀念」しようとする。動搖と不安が離脱しうるものとなれば、途は少くも先づ事態の諦視を措いてあり得ないのである。

生はその經過の中に自然に成立つ無數の知に於て、己が相貌を少くもその漠とした輪廓に於ては、すでに自ら眼前に浮べてゐると云へる。併しかゝる自然的な知の世界は、各自の基礎相互の關係の曖昧な雑多な諸系統の亂立であり、たとへ嚴肅な危機は俟たずとも互ひの接觸撞着に於て不斷に動搖を免れず、到底そのまゝ、その諦念に於て生を安堵せ

しむるには足りないのである。もの、根本的な「觀念」への意圖に於て哲學的となる知性は、すべてを根柢から吟味し直すべく確實な己が出發の足場を求めて、必ず先づかういふ問ひの立場に立つ。疑へないものはあるか、あるとすればいかなるものであるか。

この問があるのは云ふまでもなく疑ふといふことが抑へずであるからである。疑ふとはいかなることであるか。一應は確かに解つてゐるのに相違ない。少くも疑ふといふ體驗がすでにそれならぬものから區別し得られるのであり、それでなければ上の問も凡そ意味をなすことはできないのである。

疑ふとは何かを疑ふのであるが、疑はれるのは單なる物でなく事柄である。言葉の上で單獨に人や物が疑ひの對象となる場合も、實はそれらに就て何事か、疑はれるのであることは明白であり、一般にSがPであることの眞なることが疑はれるのである。PがSへの結合に於て一個の眞なる判斷として安定しようとする傾向を何らかの程度にもち乍ら、同時に(限定の種々の度合に於ける)Pならぬものが同様Sとの安定的な結合に達しようとして陰にか陽にか之に對抗する所、その傾向に於て逡巡停滞を餘儀なくされる所に疑ひが成立つ。いはゞ可能性の餘剰空間の存立に於ける知性の一種の動搖であるが、例へばあたかも平らかならぬ盤の上に置かれた重さある球のそのやうに、不斷に安定を求めて居り、又それ故にこそ起る動搖である。而して、外から與へられるにせよ内から生起するにせよともかく何らかの自稱的乃至可能的な判斷が、尙疑はしきものとしてその主語述語的結合への安定を阻まれるといふことは、即ち他の可能的結合が之に對抗してゐること、換言すれば、疑はしからぬものとしての不動の結合が、この阻止に於て成る全可能的領域を通じて、尙求められてゐるといふことである。疑はしきものを疑はしとする否定的消極的一面

と、可能的な疑へぬものを追求する肯定的積極的一面とは、疑ひに於て直ちにその表裏をなす。上に譬へられた盤上の球が断えず地球の中心を指してゐるやうに、疑ひなる知性の動搖も亦、安定點としての眞なるもの疑へぬもの、可能的存立と之への不断的志向とを、少くも暗に必ず含んでゐなければならぬ。

右の如きものとして、疑ひは即ち知性の具體的態度に外ならぬ。知るものは具體的には疑ふもの、換言すれば知らうとしてゐるものである。成立つ限りの知を断えず批判し吟味し否定しつゝ、あくまで究極の眞實知を求めゆくものである。満足たり休止たる限りの知は疑ひの單なる抽象態に過ぎぬと云へるのである。

疑ひに於てその否定の一面がその肯定の他面と直ちに相表裏するといふことは、之を別の言葉で云へば、批判は批判の立場そのもの、直接的肯定を離れて成立たぬといふことであり、更に云ひ換へれば、知の吟味は吟味せられざる知を以てすることなしには始まることのできぬといふことである。知性の嚴密な自覺的出發は、その意味に於て、例へば家屋をその礎石から築き直す如きとは、本質的に相違せざるを得ない。そこには大地の如き前提は許されぬのであり、知は自ら云はゞ土臺たると共に建築物たらねばならぬ、自ら材料たり道具たり働き手たらねばならぬ。血で血を洗ふといふ言葉のやうに、知は知を精練するに知を以てする外ない。知的に眞に一切の支點たるべきものを以て出發しようとする知性は、自らの批判的態度に徹する限り、必ずや一種の免れ難い循環の意識に於て、一應の昏迷を免れぬ。不可疑的確實知を得べく一先づ一切を疑ふと云はれるにも、少くも自然的既成知の一切の疑はしき、従つて又その疑はしきの認知に至る反省の全系列は疑はれて居らぬのである。我々のこゝに至る反省も亦、不可疑的な知の確立やその本質の究明を得るに先立つて、唯直接に自ら疑ふことをなさずしてのみこゝまで來ることを得たのであり、

今後も亦さうである外ない。知的に所謂アルキメデスの點を求めるとは、知が自己の立場を除去しゆくことであるとも云へるが、立場の除去は立場を豫想する。一種の循環は竟に免れない。免れぬ故犯さねばならぬ。併しそれは之によつて平面的な一圓を描くためでなく、却つていはゞ螺旋的に深さの進行を得んがためである。

二

疑ひの何たるかを瞥見し得て、始めの間ひに歸る。疑へないものはあるか。疑ひそのもの、直ちに豫想するものがある以上、それはある。或判断が疑はしとされ、その主語述語的結合に安定を許されぬといふことは、即ち他の可能的結合がそれに對抗してゐること、換言すれば疑へないもの乃至少くもより疑はしからぬもの、可能が疑はれずあるといふことである。逆に、より疑はしからぬもの、可能が疑はれずあるといふことは、即ち當面の主語述語的結合が尙安定を許されぬもの疑はしきものとされてゐることである。疑ひが可能なるには當然疑はれるもの、疑はしきは疑はれ得ないが、疑はしきを疑はぬとは唯疑ふといふことに過ぎない。疑ひの可能に豫想されて疑へぬものとは、畢竟疑ふことそのこと乃至疑ひのはたらきそのものであるといふに歸着する。疑ふこと自身乃至疑ひのはたらきそのものは、疑はるべきものが疑ひの前面にあるとして、いはゞ直ちに疑ひの背後をなすのである。

疑ひのはたらきそのものが右の如く疑へないとして、こゝに所謂疑へないとはいかなる意味に於てあるか。疑ふとは何かに就て何事かを疑ふのである、疑ひは判断の立場にのみあり得る。然るに疑ひのはたらきそのものは事態の疑はしきを唯直接に生きるのみであり、そこには例へば、「これは疑はしき判断である」といふ如き主語述語的分離結

合のいかなる痕跡も存しない。當に外に向つて命題的な陳述となるべき知の見出されなければならず、唯内面的に「これはこれである乃至かくある」としての純性質的な原始的自覺さへない。當然いかなる疑ひもそこに存立の餘地が無いのである。こゝに所謂疑へないとは、主語的なもの述語的なもの相分れての知たるの意識に於ける本來の知として立つて疑へないとの謂でなく、その意味の知の立場からはむしろ知以前なるものとしてそこに疑ひの全く存しない事態が、却つて疑ひそのものをはじめて存立せしめてゐるといふ意味に外ならぬ。疑ひに際してもの、疑はしさが疑へぬのは、その疑はしさが直ちに生じられることを措いて疑ひは抑々成立たぬ故であり、若し反省に於て現はれる如き主語述語的構成に於て一個の知として立つのであるならば、その限りそれは十分疑ひの對象ともなり得なければならぬ。實は疑ふべからざるものを疑はしとしてゐるのであるかも知れない。而して若しかく疑ふとすれば、かゝる疑ひそのものはやはり、こゝにかく疑はれるもの、疑はしさを唯直接に生じることゝ於てのみ、成立つのである。疑ひは、立場として直ちに前提されるものへの逐次の反省に於て、内容的にはその侵蝕をどこまでも進めてゆき得乍ら、而も形式的にかゝる懷疑的反省のあらゆる段階を通じて、あくまで疑ひの背面をなし、その前面には遂に立つこととなく残るものがある。即ち疑ひそのもの疑ふこと自體、換言すれば疑ひの我である。

いかなる反省もの自體乃至直ちにその背後をなす眞に直接なるものは、その本來の直接態にいかなる判断的な知も存しないばかりでなく、之を反省的に捉へようとしても、「これ」といふ如き主語的な指示と凝視とをあくまでも逃れゆき(何故ならば却つて直ちにかゝる指示そのものであつてその前方にはない)、従つてそれのいかなるものなるかの内的積極的規定は、之を明確に得るに最も難いのである。併しいかに所謂知以前であり反省の直視をあくまで逃れぬ

くとはいへ、たとへ間接的消極的にもせよともかく之に就て云爲せられるのであつて、すでに無ではない。却つてそれは唯いはゞ無主語的に「あり」とのみ己れを表現するといふべきものである。

普通に現在^の體驗は疑へぬと云はれるが、その所謂體驗の概念が或生内容に關する何らかの「かくあり」の意識を含むべき限り、それはすでに眞の眞味の知以前ではない。もの、純性質的な自覺と雖もすでに、内面的に、知の凝視を己れに牽くべく促すもの、主語的な先行と、凝視の中に遊離し顯現し來る性質的原始形相のそれに於ける述語的な自己再認といふ複合的事態に於て、成立つのでなければならぬ。原始的とはいへ、すでに本來の知的立場の初階である。

かゝる知が成立つには、すでに、かく知る知そのもの乃至かく知ることそのこととして、主語的な促しの始發以來、かゝる知の成る全過程を直ちに裏附けて常伴なるものがある。眞に直接なるもの、いかなる反省をも含まぬもの（何故なら反省そのものであるから）として、それはまだ凡そ「かくある」ことなく、差當り唯端的に「ある」のである。

具體的に見らるゝ限り、生のいかなる内容も、直ちに生きられ直ちに行ぜられる直接なはたらきの一面を缺くことはない。皆夫々疑はれることなき我の有に於てある。併し、生の個々特定の内容を裏附ける限りの個々のはたらきは、生の到る所いかなる瞬間に就ても見出され得るとは限らない。それらの有は一般的に云つて單に假言的であることを免れない、若しあらばあるに止る。然るに知そのもの乃至知るはたらきそのものは、これら個々のはたらきをも亦直ちに知ること^{に於て}、之を（例へば何處にか吹いてゐる風や流れてゐる水の如きと異つて）ともかく生の直接の内容としてあらしめて居り、之によつてそれらははじめて、夫々その或持續に於て一つのはたらきたり、相寄つて多をなし、互に關係に於て立つものたることをも得るのである。かくの如きものとして、それは凡そ生のいかなる場所にも

見出され得ないといふことはない。生を不斷に裏附けて居り、省られる限り見出され得なければならぬ。眞にそれの缺くる所には、その無もあり得ない、それにとつては、あらゆる意味に於けるその外は、却つて實はその内に成立つ。個々のものに夫々ある始まりや終りもそれにはあり得ない。何か、始まるといふにはそれならぬものがそれに先立つてゐたことの知を缺き得ず、もの、終りもそれならぬものが之に次ぐことの知を缺くことができない。知そのものは始まりや終りの前後に互らねばならぬ。即ち自身始まることを得ず終ることを得ないのであり、却つてあらゆる始まりや終りが直ちにその上にのみ成立つのである。「あらばあり」でない意味に於てもそれは端的に「ある」、「あらば」と考へること自體却つて直ちにその「あり」を實證するのである。

三

併し翻つて考へて見るに、直接なはたらきそのものに主語述語的分離結合のいかなる形跡も無く、従つてそれは本來の知の立場からは常に知以前といふべきであるに相違ないとしても、かくの如きものをともかくありとなし、疑ひ乃至知にとつて缺くべからざるその反面であるとなすは、すでに本來の意味の知でなければならぬ。知以前も知以前たるのは知に於てある。上にはかゝる知を明白として唯疑はなかつた。それは疑へない知なのであるか。

直接なはたらきに即しては、それが有ることも、はたらきであることも、そこに判断知の痕跡の存せぬことも、それが生の具體的内容の缺くべからざる一面たることも、本來の知としてはまだそこに存立することはない。かく考へることを含めて、それらの知は、すでにその直接な立場を離れ之を省る立場にのみある。而して事實上直接に少し

も疑はれて居らぬこれらの知は、之をあらためて反省してみても、いづれもやはり一種の内面的な明白さに於て一應疑へぬと考へられ、而してかく考へられる際におけるそれらの知は、すべて、唯現前に露呈される事態のそのまゝの表現として、かゝる現前の事態を基底に推量的に之を超える或未來の冒險的豫期といふ如き意味を少しも含まぬと考へられてゐるのである。所謂「我あり」なる判断も、それが、例へば疑ひに即してそこに疑ひそのものとして内面的に現前する事態を直ちにそのまゝ告知するのみであり、例へば續く現在にも同様の我が見出さるべしといふ如き推量的豫期の意味を含むこと少ければ少き程、換言すれば、現前の事態を單に内面的に「これはこれである」といふ代りに、唯それを一般に告知するに足る客觀的記號を用ひて止ると考へられるれば考へられるほど、確實不可疑的と感ぜられる。併し單に記號を用ひること、雖も、それがすでに客觀的たるべきである以上、それによる呼名や再認に過誤の可能がもはや絶無とは云へないのであり、その限りその確實さは、單に「これはこれである」としての内面的な自知のそれには到底及ばぬと云はねばならぬ。この後なる知としての極限的な段階は、普通に現在の體驗が疑へぬと云はれる時、それが直接に生きられる意味に於て唯「ある」のみでなく、何らかの「かくある」ことの意識に於て疑へぬと考へられるのである限り、その所謂疑へぬ體驗の段階に外ならぬ。

その種類の如何を問はず、凡そ現在の體驗は、現に「かくあり」と内面的に自知される如く正しくそこにあることに於て、もはや絶對に確實であり、凡そ夢たると醒めたと、或は又例へば感官に於ける異常な缺陷の有ると無きとの如きを問はないと考へられる、所謂欺く悪魔の存否に關せず、天地の有無に關しないと云へる。現前の體驗内容が何を意味するかの解釋を毫も含まぬ限り、その事は當然であつて、解釋を含まぬ所いかなる豫期もあり得ず、いかなる

豫期も無い所いかなる過誤も欺瞞もあり得ないのである。

一般に現在の體驗が疑へぬと考へられる時、その所謂疑へないことの中に二面が區別される。例へば或肉體的痛苦が現在するとせよ、生は一方に於て、その原因の追究と之が除去によるその痛苦からの解放といふべき方向に沿ひ、いはゞ一重にして一方向的な一聯のはたらきを直ちにそれに躡がしめてゆく。即ちその痛苦の現實性を直ちに生きるのであり、そこにはその痛苦やその直接的な生のいかなるものなるかの知は却つて明瞭を缺くことを免れない。勿論痛苦の原因の追究は、その痛苦が(過去の經驗と關連せしめらるべく)いかなる性質のものなるかの知をも亦要求すると云ふべきであるが、そのやうな知も、ではまだ「これはかゝるものである」といふ如く知のはたらきのいはゞ屈折的・二重化に於ける本來の知となるに至らずして、かゝる明瞭な凝視を得るより先にまづ、同様反省的な佇立停滯無き然るべき他のはたらき(例へば或過去の經驗の想起の如き)を直ちに已れに次がしめゆくのみにである。このやうなものとして、それは本來の知以前であり、そこには當然いかなる疑ひも存しない。いかに懷疑に徹底するとしても、この意味に於ける直接的絶對的な信を行することなしには、抑々疑ひそのもの、如きのあり得ぬのみでなく(何故ならば上にも述べた如く疑ふといふことは疑はしさを唯疑はぬことである)、總じて一刻の生も保ち難い。この一面に於ては、所謂體驗の不可疑性は絶對的と云へる。併しこれによつてはまだ本來の意味に於けるいかなる内容的な知も確立されるわけではない。

併し他方に於て、すべて生の内容は、絶えず自ら主語的に知性を促し、いはゞその佇立と凝視とに於て、已が内容の明瞭な述語的自覺に達しようとしてゐるものである。而して、その意味に於て本來の知的立場に入るための、いは

と闕とも云ふべき限界的初階をなすものが、即ち何かに即して唯内面的に「これはこれである、かくある」としてのその直接の自知であり、もの、性質的自覺である。所謂體驗の概念は、少くもこの意味の初階的な知の意識を、一面に於て缺き得ないであらう。而して、専ら自己にか、はつてあるといふべきこの種の知は、現前の内容に關しまだ本來の意味に於ける何らの概念的解釋をも含まぬものとして、當然過誤と懷疑の可能を超えると考へらるべきこと上に述べた如くであるが、併しそれは嚴密に考へて、果していかなる意味に於ても眞に不可疑的と云へるものなのであらうか。

四

體驗の内面的な直接知は所謂内部知覺として、之に對する所謂外部知覺が、現前の感覺的體驗を基底に之とこの現在を超出する現實的並びに可能的なあらゆる志向との融合的總體としての外界を描き出し、必ず未來への或冒險的豫期を含むものとして、知としての絶對確實性を到底要求し難いものに對し、それにあつては知るものと知られるものと直接し、且現前の内容を推量的に超出する如き意味を毫も含まぬものとして、知としての確實の極限に達し得ると考へられる。勿論嚴密には、現在體驗の單なる符號による告知といふべきものが、すでにその客觀性の十分問題となりうる呼名や再認を含まねばならぬが、まだ何らの命名無く疑はるべき何らの再認も無き所、全く獨自な純性質的者の自同的存在が極限的に考へられる。それは凡そ何ものかに關し生の營爲を指導すべき函數的法則といふべきもの、含蓄に於ては正に貧寒の極とも云ふべく、その意味ではまだ本來の概念的意味的な知とは云ひ難いにせよ、ともかく

或性質的者の「かくあり」としての明瞭な知たるには相違無く（所謂明晰判明の意識とは他を排する矛盾の一面と直ちに相表裏するものとしての自同の意識に外ならぬ）、内的事態に關する限り却つて最も豊かにして明らかかな知といふべきものである。

凡そ知は必ず何かを、即ち或ものを知るのである。知らるべきものとしての廣義の有が知に先立たねばならぬ。知は之に準據し之を目標とする。眞理たることの保證がそこに求めらるべきそれは基準であり、そこに到達し得てのみ眞に疑へない知のはじめで確立すべきものである。それは判斷に於て主語の意味する所であり、述語的把握としての知が之に追隨するのである。主語的に知性を促しいはゞその瞳を己れに牽くものは、知に先立てるもの未だ知られず唯有りしものとして、述語的把握たる知の現在からは、すでに過ぎ去れる或ものでなければならぬ。内部知覺の場合、云ふまでもなく知らるべき眞の現在點がそれである。それは、いはゞ先驗的自同判斷の主語「これ」によつて指示される極として、「これである」としての述語的な知にとつては、いかほど近いにせよ、ともかくすでに回顧せられる或ものでなければならぬ。眞の現在點は、内部知覺にとつて、限り無く之に近接し得て而も竟に達すべからざる理念的極限たる外ない。この事は知らるべき體驗が瞬間的飛過的であればある程明瞭であらうが、總じて體驗の殘像的侵潤性といふべきものを考慮する時、嚴密な意味の瞬間的體驗といふものは事實上無いのであつて、いかに要素的に單純なものとも雖も具體的には必ず何らかの可認的持續をもち、そこに知は先立つ有と共に後續する有をもつと云へる。而して先立つ有により一先づ成立する知は、續く有に就ての同様な知によつてその自己保持的傾動（惰性は一般に一定安定の要求として、多と動搖への夫としての倦厭性と共に、生そのものに本來的である）を破られることがなく、前

後合致し融合して阻碍なき所情性的進行はいはゞ加速速度を得、更に續く有に對しては知は先行的豫期的に之を迎へるに至る。即ち同一持續體驗に關し内省的に直ちに現在への到達が考へられて疑はれない所以であるが、實は先行知への合致によつていはゞその質量を加へゆくべき後續知自身、やはり先行知と同様己が主語的な有への或回顧たるべきのみでなく、一個の明瞭な知たるべき限り前後合致の意識そのものとも亦、嚴密にはやはり合致そのもの、眞の現在に對して同様の關係に立つのでなければならぬ。意識我の意識に於ても、意識する意識たる眞の現在には、意識の正面的把握をあくまでも逃れてゆく。通常の經驗的意識に於て、直ちに現在そのまゝの把握と考へられるものが、實は皆、如上の複合的な先驗的事態の上に成立つのでなければならぬ。

知らるべきものとしての有はかくて嚴密には常に、知の現在からはすでに過ぎ去れる或ものでなければならぬ。それが或場合更に知の現在に於ても尙有るものと云ふこと、換言すればその持続性や恒常性は、實は如上の意味の要素的な回顧的認識の重疊とその前後歸同とを要するのである。要素的に見らるゝ限り、知は必ず回顧である。對象は常に「有りしもの」である。直觀に對する反省乃至主語的なものゝ述語的把握としての知にとつてこれは當然であるが、唯普通に所謂直觀知なるものにも先驗的には如上の事態がどこまでも含まれゆくと考へなければならぬ。いかなる直接知にも根源的に被觸發の意識は否定できないのであり、凡そ何らか「かくあり」としての知の意識のある限り、それは必ず主語的に先行する何かへの或述語的回顧でなければならぬ。凡そ知は何かの知であり主語的なものゝ述語的把握である限り、對象たる有よりの或距離の意識は當然知にとつて竟に免れ難い所である。所謂内部知覺なるものも、以上の如く見て來れば、嚴密には尙根本的懷疑を脱し得てゐないと考へられなければならぬ。

闇の中の眼に向つて然るべき任意の遠方から、例へば一つの燈火が近づくとする。或瞬間に於て光の感覺が始まる筈である。この感覺の始發から生は一つの新しい位相に入るのであるが、その極微の發端は内容的に尙無規定といふべきものである。「かくあり」としての自覺がまだ無い。併しすでに無ではない。或もの、何か有るもの、積極的なるもの、生を促し喚かすもの、例へば眼瞼はそのため逸早く眼球の前面を拭ひ、水晶體や虹彩は又夫々然るべくその表面の曲度や瞳孔の大きさを調節するでもあらう何かである。感覺的發端はかくてまたその内容の自覺無きまゝに、すでに生を促すもの、生の新様相を己れに次がしめるものである。次ぐべきものは多様である。生は或は所謂自動的乃至反射的運動に於ける如く動作的に直ちに異質的な内容に轉移し行かうとし、或は又却つていはゞそこに佇立し、それを見直し見詰めようとする(勿論かゝる佇立や凝視そのものがすでに廣我に於ける一種の動作であるには相違ない)。

生のかゝる凝視的佇立への促しが即ち原始的主語「これ」の意味する所に外ならぬ。「これ」は即ち根本的には生に於ける或始まりの指示であるが、まだその内容の自覺には至らぬのであり、唯生の流動的々領域における或一者の測定たるに止る。或内容がいはゞ生の尖端を占めて他者並立の餘地を剩さず、他者は唯時間的に前後する規制の關係に於て立ちうるのみなる時、そこには即ち直接的な生があるのであり、こゝから更に本來の知的立場に入るためには、一内容のかゝる獨占が破れて、いはゞ空間的な他者並立の場面が開けなければならぬ。即ち該内容を特殊とする普通の發現がなければならぬが、直接的な生からのかゝる知的立場への移行に於ける或一者の測定が即ち「これ」である。或始

まりに於ける他の無數の諸傾動を排しての生の凝視的佇立がそこに成立つ、即ち知的立場の開始である。

次に、「これは」として述語が要求されて居り、判断が完結しなければならぬ。原始的主語に歸屬すべき原始的述語は何であるか。根元的に知を促すものが何であれ、それが他のいかなる述語的規定を得るにも先立つて、先づその始發に即し唯「これである、かゝるものである」と云はれ得なければならぬ。即ち生は賦をそれに向け、この凝視に於て、その内容のいはゞ積極的殘像といふべきものを得る。即ち、一度は否定される他の諸傾動の復活に於て、當面の對象からの微小離脱を禁じ得ない生の凝視は、かゝる離脱に際し、對象の直接的な記憶線を尙保持する。そのものに關する形式的觀念的なるもの、最初の遊離であり析出である。而もその微小離脱は直ちに又反撥的に否定せられるのである、離脱復歸のかゝる微小震動に於て「これ」の直接的映像は漸次自同的純化の度を加へゆき、かくて顯現し來る原始形相たる性質的普遍者は、その自同的純化乃至典型化に於て主語的基地からの或遊離態に自己を保ちつゝ、元に還つて再びその基地に自己を見出す。即ち「これである」としての「これ」の原始的自覺である。

生内容の原始的自覺が略右の如きものであるとして、そこに眞の促しそのものとしてともかく「あり」はするが、尙些の「かくあり」としての述語的自覺を含まぬと考へられる主語的な始發と、すでに或性質の明瞭な意識たる述語的者と、ともかく相互に區別されその限り相異なる二者であると云はねばならぬが、然らばこのやうな二者はその相異性にも拘らず、「これはこれである」として或同一者に歸着し、主語態から述語態への經過が單に生の異なる二位相の繼起でなく、却つて或一内容の自覺であり自己還歸であると見られるのは、抑々いかなる保證に據るのであるか。

勿論主語的な「これ」は實は具體的には述語的自覺をすでに或程度に含んでゐるのであるとも一應考へることができ

る。凡そ他を排しそれから自己を劃する判明化の一面は、反動的な意識の内向に於ける己が内容の明晰化の一面と離れることはできない。所謂原始的言語の措定に就て、他の諸傾動を否定しての或一者への佇立が云はれる時、かく他者を云ひそれへの反撥を云ふこと自身、すでにその一者の或自覺を云ふに外ならぬとも考へられる。所謂促しなるものも具體的には視覚内容の夫と觸覚内容の夫とは異り、同じく視覚内容に就ても光の度により色の性質によつて夫々異ると云へるであらう。即ち述語的に之に追隨すべき内容の性質的自覺が、すでに或程度にそこに含まれてゐるとも云へるのである。

併し之によつては問題は唯一步彼方へ押し遣られるに過ぎぬ。即ち、述語附けが正當ならんがためにかく豫想せられる言語的自覺そのものは、然らば、自身いかにして成立つかと問はれねばならぬのであり、この自覺に於ても、促したる言語的先行者は、一層隱微とは云へ、やはりすでに或自覺を含むといふとすれば、問題は又更に溯る外ないのである。

加之、元來自覺の言語的潜在、述語的顯現といふ概念自身一個の問題である。ものゝ潜在態と顯現態とはともかく互に差別される或ものでなければならぬ。前後何らかの差別の意識無くしては顯現の意識もあり得ない。言語的な潜在の現在に述語的な知の現在からはすでに唯回顧せられる外なきものであり、言語的な不明瞭態と述語的な明瞭態とはともかく互に區別される二者でなければならぬ。然る限りかゝる二者が夫々言語とし述語として或同一者に歸着するといふことは既に一種の綜合であるが、知性はいかなる根據によつて之をなすのであるか。

覆ならぬ限りの自同判断のすでに含む所であり、AはAであるといふ意識はAの指定にはたらくはたらきそのものとしての私の唯一同一性の意識を裏打ちとするのであつて、畢竟私の自覺に於ける知るものと知られるものとの歸一の含む綜合に外ならぬ。その限りそれは凡そ之を豫想することなしに知は成立たぬところのものであり、之が批判も唯之を豫想しつゝなされる外ない。自同判断に於て主語から述語への経過が何らかの展開たることの意味を含み、二者ともかく差別せらるべき限り、そこに一種の綜合が含まれてゐるといふべきにせよ、かゝる事態に於てともかく一個の全くは空虚ならぬ判断が成立つには、すでにそこに主語的潜在なるものと述語的顯現なるものとの各々が、夫々もはや潜在顯現といふ如きいかなる分離の意識をも含むことなき眞の同一態に於て、直ちに存立してゐなければならぬ。私の自覺に於ても、知る我は直ちに知られる我ではないと考へられる反面に、抑々知る我と云ひ知られる我といふかゝる私の意識そのものが、實は直ちに二者の合一に於て成立つのである。

知るとは何かを知るのであり、知たることの意識は主語と述語乃至有と知との一態の分離の意識を離れてあり得ない。知の確實意識も實は何らかの綜合の意識ある所のみ可能である。眞理たる意識は或主張の意識であり、主張の意識は或對抗の意識に外ならぬ。不確實たり疑はしきものたりうる所にのみ、確實であり不可疑であるとも云ひ得られる。主語と述語、知者と被知者乃至有と知との何らの乖離の意識も無い所には、もはや凡そ知たることの意識と共に確實や不可疑の意識もあり得ない。而もこの意味の眞の合一態は、あらゆる知が一面に於て必ず之を豫想せざるを得ない所のものである。知に於ける主語的若述語的音間の或距離を云ひ、所謂自同判断乃至一般に自覺の綜合性を云ふにも、かく批判する基準とし足場として、もはやいかなる乖離や綜合の意識も無き眞の同一が、直下に豫想されて

るなければならぬ。かくの如き同一は、ともかくそこに何らか意識の含まるべき限りに於ては、尙或意味で知と云はれ得るにしても、かゝる知にはもはや自ら知たることの意識は無く、そこに生は直ちに知に於てあり知を唯生きるのみに云はるべきである。直ちにはたらきそのものたるもの、生の營爲一般従つて又判断知一般が之を離れて存立し得ないのは當然である。而もかゝる同一は、反省に於てその内容が一個の知たるの意識に於て立つ限り、先づ自己に即しての同一判断即ちその原始的な性質的自覺としてさへすでに、主語的者述語的者相分れての一種の綜合の意識は必至となる。この綜合を更に保證し導來すべきものは求めらるべくもなく、之が批判的營爲の一切が却つて念々直ちに之を豫想せざるを得ない。そこには唯知性にとつて最も根本的にして回避すべからざる或積極的な斷定があるのみと云ふ外ないのである。

六

以上によつて得られた所を一先づ要約すればかうである。疑へないものはともかくある。疑ひ乃至知の自體といふべき最も直接なはたらきそのもの（そこには、はたらきに於て有ること、はたらきに於て知られてゐること、は、直ちに同一事である。反省的に知をあくまで區別しゆく限り、知そのものをも含めてものは有ることを得ず、却つてその知の知の……と無限の背進が避けられぬ。即ち廣く知的營爲の立場そのものは、知以前従つて又疑ひ以前として却つて疑ひの存立にも直ちに豫想せられる意味に於て、絶對に疑はれることを得ない。却つて常住に一切を裏附けて唯生きられてある（生きるとは、はたらきと知との相即の意味に於て云ふのである）、即ち我がある。

併しその疑へないのは本來知以前のものとしてある。いかなる反省もの自體でありその背面をなすものとして、いかにしてもその前面に正面的な對象とはならない。それに就て確實なのはともかく「ある」ことであつて「かくある」ことではない。「かくある」ことの規定を得べく反省せられ、事が本來の知の立場へ移行する限り、主語的な有の指示と述語的な知の之への追隨、換言すれば知にとつて有よりの或距離の意識が必至となるのであつて、當然根本的懷疑の眞の離脱が望み難いこと、知的立場の限界的初階といふべき現在體驗の單なる性質的自覺（それは形式的には自同判斷であり、更に純我の自覺である）の如きに就てもすで見られる所である。即ち疑へないものに關し、その内的積極的な規定を問ふ意味での「いかなるものであるか」は決定的には竟に答へられることができない。知にとつてその本性上免れないのである。

疑へないものを求めるとは、知が有への合致を求めることである。求められるものは却つて自ら直ちにそのものであり乍ら、而も反省的には永久に之に到達し難い。直ちに有り直ちに生きられる意味に於て、換言すれば我として形式的には、それは不斷に現前であり乍ら、その内的積極的規定に於ていかなるものであるかの知的把握に對しては、即ち所謂實在として内容的には、それは永久に課題である。

七

知らるべきもの、知がそれに到達して斷言的確實性を得べきもの、換言すれば判斷に於て述語的把握の目標たる主語的なるもの、極と云ふべきものは一種の矛盾を含む。それは一方に於て知らるべく未だ知られざるものとして知に

先立てる有であるべきと共に、他方に於てそれがかく知を促し知の目標となるといふには却つて或意味に於てすでに知られてゐるのでなければならぬ。

有たることは尙知たらぬことであり、知たることは尙有に到らぬこと、考へられ、而も有たると共に知たらねばならぬといふこの矛盾は、究極に於て知有の一致が想定せられるより外に解けやうはない。而も主語的なるもの、極は、知の始源とし目標としてその必然の豫想であり、存立せねばならぬ。即ち直ちに没頭的に生きられてある意味に於ける實有の現在性は、形式的に、知と有乃至はたらきと凝視とそれに於て直ちに一致すべき我の有として、あらゆる懷疑を越えて立てられてある。凡そ知的營爲の絶對の豫想であつて、いかなる之が批判も唯循環を重ねる外ない。

併しそこに確立されるのは端的な「あり」であつて、「かくあり」の意味に於ける本來の内容的な知ではない。知らるべきものとして有たるべきと共に、既に知られたものとして知たるべしといふ主語的矛盾には、尙殘る一面がある。即ち述語的なるものに先行すべき主語的なるものは、ともかく知が抑々そこに始まるべく必然に豫想されるものとして、その端的な「あり」に即する知に於てあるべきに止らず、更に凡そ確實知の主語としては、却つて常に「かくあり」としての内容的な本來の知をも亦、何らかの意味に於てすでに含むべきことが要求されるのである。判断に於ては述語が主語を規定すべきのみでなく、却つて主語も述語を規定しなければならぬ。それは決して任意の述語を許さぬのである。即ち述語附けに於て知らるべき主語的なるものは、實は何らかの意味に於てすでに内容的に知られてゐるのでなければならぬ。

57 凡そ確實意識の根源は自同性にある。AはAであるといふ意識は畢竟Aの指定にはたらく我の唯一同一性の意識に

外ならず、凡そ一つを選び探つてのみはたらきうるものとしての意志的な我の自意識に、凡そ判断の必然感は由來するのである。確實知は形式的には常に我の自覺でなければならぬ。自覺そのものが實は一種の綜合であること上に述べた如くであるが、かく批判する批判そのものも直ちに之を豫想せざるを得ないこの意味の綜合は、その本性上凡そ知が知たること、切り離せぬものであり、その絶對豫想たるものであつて、知としての確實性は従つて當然こゝに極まるものと考へられなければならぬ。所謂即自態から對自態への意味に於て、それは又潜在と顯現の意識でもある。判断の述語附けに於ける絶對確實乃至所謂明證の意識が可能なるためには、主語そのものがすでに少くも暗に述語を含んでゐなければならぬ。

併しかくて主語が自らすでに或内容的な知であるとすれば、かゝる主語的な前提の上に得られる限りの自同的確實意識は云ふまでもなく唯内在的のものに過ぎぬ、主觀的であり假言的である。知が眞に客觀的たらんがためには、換言すれば、その確實意識に於て斷言的超越的たらんがためには、豫想される主語的な知そのもの、由來と根據が更に問はれねばならず、問題は無限に溯行する。若し眞に客觀的な確實知が現にあるとすれば、究極する所主語的な知が直ちに有たるのでなければならぬが、凡そ「かくあり」としての内容的な知が、自らかゝる知たることの意識のまゝに直ちに有であることは不可能であり、何かを知ることの意識、換言すれば尙十餘的には達せられぬものとしての有の先行とそれから或距離との意識なしには凡そ知の意識はあり得ない、知たるの意義をなさぬのである。勿論或知の内容が、その絶對肯定的な信に於て直ちに生きられる意味に於て有たることは可能であるが、その時はもはやその知の内容は、自ら「かくあり」としての知の意識に於ては却つて没し去り、唯直接なはたらきに即する知に於て端的に

唯「あり」とのみ已れを表現する我のあり方に於てある外ない。即ちそれはもはや本來の意味の知と云はんよりはむしろ知以前であり、かくの如きものを主語に、何らかの内容知的な述語附けはいかにして之と能く自同意識に於ける確實知を構成し得るかば解し難いのである。知有一致する眞の現在とは所謂内部知覺にとつても必ず既に回顧せられる或過去であり、その眞相が正にそれに續くこの現在の明瞭な内容に外ならぬとなすは、すでに唯事實としての知性の或積極的な斷定に過ぎない。かくて主語的なるものは、それへの述語附けに於ける明證的確實知を可能ならしめるためには自らすでに何らかの内容的な知でなければならぬが、而もかく知たる限り尙達せられぬものとしての右の先行の意識を缺き得ず、その確實意識は實は唯主觀的内在的のものに過ぎぬことが省られざるを得ないのであり、而も又、確實意識の客觀性を得べくあくまで自ら有たらんとすれば、却つて内面的に明らかかな自同的確實意識は脅かされなければならぬ。實在として内容的に疑へないものたるべきもの、追求に於て、知性はかくて一つの免れ難い窮地に立つのである。

八

常識の立場では知らるべき主語的な有は「かくあり」としての自證の届くものとしての經驗の世界であり、知るとは即ち知性がかゝる主語的なるものに就てその内容を模索し分析し出して、あらためて之を述語的にそれに歸屬せしめることである。知は少くも忠實な所謂記述的態度に止る限り、所謂「事實である」として絶對に疑へぬと考へられる。

素朴な實證主義である。併しいかに所謂事實に忠實な單なる記述と雖も必ずすでに何らかの客觀的意味的な概念によ

る或解釋を含まざるを得ないのであつて、その限り到底根本的懷疑を免れ得ぬこと云ふまでもなく、事實の最も直接なものと云ふべき現在體驗の直接內面的な認知に於てさへ、知は尙眞に主語的な有に到達し得てゐないことは、上にも見られた如くである。

併し省れば、右の如く考へられる際の知は實は所謂模寫主義的に考へられてゐるのである。知は先行する有をそのまま、忠實に映し取るべきものと考へられ、その限り先行する有は常に回顧せられる外なき或過去としてかゝる回顧に於て映し取られる像の眞實性が問題とされるのである。併し反面から云へば、體驗の直接知や我の自覺に確實不可疑の意識あることも亦否めない事實なのであつて、若しこの事實の一面に忠實になるとするならば、知の模寫主義的見地は當然改められ、却つて知性自身による積極的な綜合措定即ち一種の生産が、そこに主語的に想定せられなければならぬ。知に於ける絶対確實性の意識に即しては、知性はもはやその述語的なはたらしきに於て、主語的なものを忠實に映し取るべく之を模索的に追隨してゐるのでなく、却つてそれを自ら積極的に構成し措定してゐるのでなければならぬ。知性は常に自ら先づ主語的に措定してのみ、之に就て述語的に絶対の確信をもちうる。絶対確實の意識は我が我への逢着の意識に外ならぬのである。

凡そ知の模寫的歸納的見地に偏して立つ限り、懷疑論はその當然の歸結でなければならぬ。知は何かを知るものであり知らるべく未だ知らねざる有が斷えず知に理念的に先行すべき限り、凡そ現實に成立つ限りのいかなる知も到底己が絶対性乃至實有性を主張すること許されぬ。實在論的見地、模寫主義的見地、懷疑論的見地は互に不可分である。

かゝる懷疑的立場を脱するには、知には知らるべく模索し追求される有が常に先行するといふ一面を暫く度外視し、却つて現に確實不可疑の意識を伴ふ知の存在することを事實として先づ承認することから出發する外ない。而して之が可能を説明すべく、構成主義的觀念論の兎地が取られなければならぬのである。即ち前の立場で模寫の對象と考へられたもの自身、實は却つて知性の措置によつて成るものであり、いはゞ述語的模寫的な知に先立つて主語的創作的な知がなければならぬといふ立場がとられなければならぬのである。

この立場は前の立場に對し決して正面的に對決するものでなく、却つて唯客觀的必然知の現實性に關する否定と肯定とを以て、互に背中を合はせてゐるのに過ぎない。兩者は二律背反的關係に於て立つのである。

前の立場では主語的なるものが知から獨立な有たること、従つてまだ内容的ないかなる知でもないかゝるものを主語に、之への内容的な述語附けとしての判斷の綜合的一面が取上げられ、後の立場では、知の自同的確實意識に即しては、知らるべき主語的者自身實はずでに知性の措置にかゝる内容的な知であつて、唯その潜在態が述語的にその顯現態に齎らされるのであるといふ、判斷の分析的一面が取上げられる。前の立場では確實意識の斷言的相對性を得ようとして、反射的に確實意識が損はれ、後の立場では確實意識の內面的明證性を保つべく、その假言的相對性に甘んじなければならぬ。この兩面の一致、即ち內面的な絶對確實意識に即して超越的に妥當する知といふもの、換言すれば、綜合的であつて而もその綜合性に即して必然的な知といふもの（それこそ絶對的な意味に於て眞なる知であり究極的に疑へぬものであるべきである）は、もはや唯知の理念であつて、現實には存しないのである。

一般に判斷に於て必然性の要求される所、定立される主語が（それに於て限定せられたものとして）反映し代表する

ところの具體的地盤の中には、必ず來るべき述語がすでに少くも潜在的に含まれてゐなければならぬ。例へば數學的判斷の如きも、その主語は嚴密には必ず或一系統の數學的世界を背後に擔ふ、或は地盤としてその上に立つ。主語の意味的志向はかゝる世界へ擴がつてゐるのであり、必然性を以て歸屬せしめられる述語はその中に見出されるのである。即ちその必然性たる實は假言的内在的なのであり、所謂分析的判斷一般に於けるそれと本性上少しも異なる所はない。主語と述語との必然的結合は、いかなる場合にも常に主語の意味的對象の自覺であり、唯その自覺に至る經過が、或場合思索と計算の幾重疊をも必要とする意味に於て、普通に所謂分析的判斷の場合に比し、一層複雑迂遠であるといふ差があるに過ぎない。例へば普通に分析判斷とされる「全體は部分より大なり」の如きも、主語「全體」は必ずしも直接顯在的に述語「部分より大」を含むのでなく、例へば差當り唯「部分の總和」としてゞも存立しうる。部分の總和たること、部分より大なること、は直接にはともかく夫々異つた意味内容であり、従つてこの一面を強調すればこの判斷は正常に綜合的とも云はれ得なければならぬ。唯前者の意味的指示の究極する所、或想像的直觀的に多面的なるものに於て、後者も亦その一面として見出されるにより、はじめて互に必然にして不可分の關係に立つのである。この判斷も例へば無限集合の如き場合を考慮に入れる時もはや決して無條件的には妥當し得ないことから解るやうに、總じて述語附けが眞に必然的たるためには、たとへ場合によつて繁簡の差こそあれ、必ずやはり本來の數學的判斷の場合と同様な或思索的手續を必要とする、即ち主語が當體的に、換言すればその意味的對象たる(內的若しくは外的な)或直觀的者に於て、自覺されなければならぬ。この事たる即ち所謂「概念の構成」の本來の意味たるべきであり、之を必要とするのは數學的判斷の場合に限るのでなく、凡そ同語反覆的ならぬ限りの所謂分析的判斷のすべてが、本來常

に之を豫想してのみ正常に成立ちうるのでなければならぬ。

之を反面から云へば、例へば「五に七を加へたもの(何らかの數に等しいのは「加へたもの」であつて「加へること」ではない)なる主語は、或統一的な意味的對象が自覺されるまではその意味的志向を止めぬのであり、かくして自覺される或内面的な想像體に於て、その十二たることは他の無數の諸規定(例へば四に八を加へたものたること、十三から一を引いたものたること等)と共にその一面として見出されるのであるといふ意味に於ては、この判斷は當に分析的とも云はるべきなのである。判斷の絶對確實乃至必然の意識の由來する所は結局自同の意識(それは上にも述べた如く所謂明晰判明の意識に外ならぬ)より外にあり得ない。主語的なるものが述語的なるものを全く含まぬ意味に於て綜合的な判斷には到底必然の意識の伴ひやうはない。必然の意識とは却つて常に述語が結局主語の含む所であつた、換言すれば、主語の意味的對象はそのいはゞ立體性に於て述語の規定をも亦自己の一面とするものであつたといふ意識に外ならぬ。自己が自己に面接し撞着してのみ内的な必然の意識はありうる。若し主語が直接顯在的に述語を含む判斷を以て分析的といふとすれば、それは所謂同語反覆的な判斷のみに限られ、「全體は部分より大なり」の如きをはじめとして普通に所謂分析判斷のすべては綜合的たるべきであり、又若し主語が少くも潜在的に述語を含むを以て分析的といふとすれば、數學的判斷の如きをも含めて凡そ必然的判斷の一切が當然之に屬すべきである。

固より反面に於て、例へば數學的判斷の主語(従つて又、それが自らそれに於て限定せられたものとして反映するところの或數學的世界)は或一系統の所謂公理群によつて、綜合的に構成せられる所である。併しその必然性が意識されてゐる限りに於ける數學的判斷は、必ず主語的な前提から述語的な歸結への經過に於てのみ見られて居り、述語

附けをかく必然的たらしめる前提としての主語的なるもの自身の知としての客觀的意義は、その場合また問題とされて居らぬのである。數學的に内在的な立場では、矛盾を含まざる限り、いかなる内容の公理とその組合せが取られるかは任意である。唯かゝる前提そのものが内容的な知としてのその客觀的意義を問題とせられるに至つてはじめて、換言すれば、綜合的定義的に措定せられるもの、所謂「存在」が、數學的に内在的な意味に於て、なく超越的絕對的な意味に於て、問題とせられるに至つてはじめて、數學的判斷は正にその綜合的一面に於て吟味せられると云へるのである。而してその場合、凡そいかなる數學的判斷も、たとへ極めて高度の確實性乃至近似的實在性こそは證し得ても、到底嚴密な意味の必然性を要求しうるものではないことは明白である。この事たる必然並びに綜合の意識の本性からしてすでに形式的原理的に明白であるといふべきであるが（綜合的必然的とは、その間に反省による立場の一轉の介入あることが忘れられての直接的な相即である限り、所謂 *Contradictio in adjectio* であると云つてよい）、例へば「直線は二點間の最短線である」といふ判斷も、二點間の最短線をこそ實は直線と呼ぶのである幾何學的内在的立場に止る限り、その自同的確實性に於て絕對的に安定しうることは明白であるが、一たびその超越的實在的意味が問はれるに至れば、之が嚴密な實證は到底打ち克ち難き困難に逢着せざるを得ない。古典的に有名な三角形の内角の和の命題の如きも、それが眞に必然的として安定しうるのは唯幾何學的、而も唯限定せられた幾何學的立場に内在的にのみ過ぎぬ。換言すれば、幾何學一般的乃至物理學的實在的にはそれはもはや單に可能的たるに過ぎないのである。併し幾何學に於てこそ尙さうであるとしても、例へば二に二を加ふれば四といふ如き判斷に至つては、もはやいかなる意味に於ても、即ち想像的内在的には勿論（そこでは一般に述語が必然的たりうる如き規定に於て主語が措定せられる

のであつて實は常に分析的である。實在的超越的な見地（こゝに判断ははじめて総合的である）に於ても亦、絶対に確實であると考へられるかも知れぬ。その實在性の驗證の如き、事實極めて容易とも考へられる。併し嚴密に考へてみると、知性にとつて到底合理化し盡し難い實質的時間の中に、何らか經驗的現實的なものに關し、例へば（粗雑に云ひ表はして）「二個の林檎を先づ机上に置き更に他の二個の林檎をとつて同様その机の上に置き、然らばこの最後の動作の後汝はその机の上に四個の林檎を見るであらう」といふ如き形に於て、この主語的前提を、その述語的歸結を絶対に確實ならしめるべく、嚴密に規定しようとして試みてみよ。そこに要求される確實性が眞に絶対的のものであり、高度の蓋然性と種的に異なる意味の必然性である限り、それはもはや到底人知の及ぶ所でないことが直ちに明白である。何故ならば、前後の作用の間にその述語的結果を不可能ならしめるべく起りうる偶然は、質的にも量的にも原理上無限であるからである。

九

知には必ず二面が區別されなければならぬ。すでにともかく措定せられた主語的なものに就て、その内容をその自同意識の上に展開し顯現する内在的演繹的な一面と、前提される主語的な知そのものが、先行する眞の有に就て、総合的にはじめて成立する超越的歸納的な一面とが、それである。知が知にかゝはる一面と知が有にかゝはる一面と云ひ換へてもよい。前の立場では必然乃至明證の意識が可能であるが、實は唯假言的相對的たるに過ぎぬ。後の立場では斷言的絕對的に確實たるべく意圖されるが、到底必然乃至明證の意識にまで高まることができぬ。現實の知はそ

の確實意識に即して必ず如上の二面を相互消長の種々の度合に於て表裏せしめてゐるのであり、綜合的必然的と考へられる知の場合、實は反省を介して相表裏する如上の二面（即ち内面的な明證性と單に高度の超越的蓋然性）が、一種の想像力的幻惑に於て混同されてゐるのである。若しその綜合的一面に即して眞に必然的な知が現存すると考へられるならば、その限り知の對象界たる有の世界は當然全く根柢的に主觀の（その内的規定に於て限定的に意識せられる如き根本形式による）措定作用を豫想することとなり、主語的な有の世界の主觀的生産に一種の形而上學的徹底性、云ひ換へれば一種超意識的神祕的な實在性といふべきものを免れず、根本的なその現象性に於て知の世界は、彼岸なる實在界といはゞ形而上學的斷層によつて絶縁されることを免れないが、必然的綜合判斷なるものが實は上に見た如く唯理念的にのみ存立するものであり、現實的具體的にはその必然的（分析的內在的）一面とその綜合的（超越的蓋然的）一面との相互顛倒的な表面化に於て、知は無限に自己否定的な進行であると見らるべき限り、知は主語的な極に於て直ちに有と相觸れつゝ、それへの近似性を無限に進めゆくものとして、實在界との間のその關係は、形而上學的な固化と超越の反對に、却つて（所謂先驗的心理學的反省の屆く意味に於て）いはゞ內在的現實的な一種の融通性柔軟性を得べきである。換言すれば、知のいかなる自己否定的進行に對しても實在は必ずしもそれから全く種的に自己を隔絶して立つのでなく、却つてその進行と相對的に自己の真相を、十全的には到底不可能ながら（この制限は所謂自由の世界への餘地を與へるに十分である）漸次露呈し來るものと考へられ得るのである。

知は必ず何らかの促しに始まる。知性に於ける根源的な被觸發の意識は到底否定できない。知らるべきものとして主語的な極であり、述語が十全的に之に到達し得てはじめて眞に疑へない知たるべきものであるところの、かゝる促

しにより、知性は一先づそこに佇立しそれを凝視する（高次的に複雑な場合をも通じて知的努力一般の本質は常に廣義に於ける凝視であり注意である）。そこに或觀念的形式的なもの、即ち何らか主語的な先行者とそれからの或隔離との意識に於ける述語的なもの（その中には感覺の明瞭な意識の成立にはたらく純性質の普遍者の如き原始的なものから更に高次の本來の概念的、潜在判斷の普遍者までも含めて考へうる）の遊離顯現があり、一旦離れた主語的基地に於けるその自己再認に於て、凡そ自覺としての知が成立つ。ものからのその形式の本質の奪取として古く封蠟の上の印跡にも喩へられたこの一種の記憶とその典型化乃至完全化（これは又同じく含蓄深く所謂「想起」と呼ばれたのである）とはもはや唯知性に於ける最根本的な事實として之を承認する外ない。

何らかの促しに基いて一先づ成立する「かくあり」としての内容的な知は、促したる原始經驗に對しては、たとへいかにそれに近接するにせよ、すでに一種の回顧であり記憶であることの意識を一方に含みつゝ、而も他方、ここには凝視の瞳を据ゑる意味の自發的な自覺行に於て、その記憶的餘勢をあくまで延長して行かうとする。あたかも力の一瞬の作用が自由物體の無限の惰性的運動となつて残らうとするにも似るのであり、かゝる自覺行的自己維持に於て、見地による或契機の抽出と不純な夾雜物の除去とが漸次行はれてゆく。而して自同的純化のかゝる傾動は、出發の基點たる原始經驗の持續乃至再現に於てそれへの自覺的還歸の繰返される程益、その生氣を加へゆくことに於て、あたかも物體の惰性的運動が同方向の力の作用ある毎に積極的加速度を得てゆくにも似ると云ふことができ、又原始經驗の一種の混沌が見地による契機の抽出と純化とに於て漸次内容的に解體されてゆくことは、同様一瞬の衝撃を受けた一群の物體が互に速度方向を異にしつゝ、各自の直線運動に於て相離れゆくにも喩へられる。而してその際原因た

る衝撃は、たとへいかほど瞬間的たるにせよ、すでに運動の方向と速度とを含まねばならぬやうに、根源的に經驗（云ふまでもなく作用的内的經驗をも含めて）に始まるべき知の一切は、その内容を必ずすでに何らかの程度に原經驗に於て暗示せられてゐるのであり、而も又衝撃の瞬間性が物體の運動の無限性に代られる如く、知の原經驗における暗示はその暗示の方向即ちその本質の自覺的顯現の方向に沿うて、質的に量的に無限に純化と擴充とがなされてゆく。

即ち所謂想像力（想像の本質は根本的には唯自覺行的自己維持乃至自己延長に外ならぬ、いゝ知性的惰性である、引き延ばされる記憶である。而して原經驗の單なる保持乃至再現を種的に超える意味のその創作性は、自覺行的延長のいはゞ諸線が相互に切り合ふ所に成立つ二次的・三次的……内的原經驗を基底とすると考へられるのである）の參與に於ける典型化乃至完全化のいとなみである。その代表的な場合として、例へば數學的對象の顯著な經驗超出が省みられるが、勿論それは決して數學の場合に限られるのではなく、いかに所謂經驗的な概念と雖も、一個の形式的普遍的なるものとしては、すでに現實的特殊を無限に超える意味をもつのである。數學的對象が、經驗の中にそのまゝ、見出される意味に於て、經驗から抽象し歸納されるといふことが到底云ひ得られないやうに、例へば概念「机」の如きも決してそのまゝ、現實の机の中に見出されるのではない。その意味的對象たる圖式的想像體は、現實のいかなる机とも決して嚴密には相覆はないのである。又反面から云つて、例へば空間に關し、その所謂先天性を證明するために、もの、内外並存等の經驗がすでにそれを豫想してゐると云ふならば、同様例へば、その上に書を読み物を書くべきものとしての或物體の經驗は、すでに机の概念を豫想してゐると正當に云へるのであり（空間的な位置附けの經驗もやはりそのものに關する可能的な或肉體的運動の指示に外ならぬ）、更に空間なしに机は考へられぬが机なしに空間は十分考へ

得られると云ふならば、その事は唯、經驗の所謂「外的な」領域に就て空間が普遍的であり、「外的」現象が空間なしにあり得ぬは自明の事に屬する)、机は然らずといふ事實の單なる指摘以上に出来るのではない。外的經驗界に於ける空間の普遍性乃至不可缺少性は、個々物の特殊性乃至不可缺少性と共に、同様唯生の地盤の上に、その一領域に關して、見出された端的な事實たるに過ぎない。與へられて見出されるといふその根本性格に於て、兩者全く同等の資格に於てある。假に若し、凡そありうる限りの經驗が空間なしには存立し得ないといふことが正常に示され得るとするならば、その時こそはじめて眞に經驗へのその先行性が證明せられると云ふべきであらうが、その不合理たり不可能たることは明白である。——例へば所謂純粹統覺に就てはその事が一應云へるかに見える。何故ならば、所謂意識一般的な我の統覺に屬することなしに凡そ我にとつて何ものもあり得ぬことは明白であるからである。併しこれとても徹底的に云へばやはり實は自明な分析判斷であり、凡そありうる限りのものところ、に云ひ得られるかに思はれるのも、實は我が自ら生に就て從來經驗し記憶する所を基にして想像し得る限りのもの(全く根本的に種的に隔絶するものは決して積極的には想像され得ない)たるに止るのであつて、所謂「我にとつて」なる有り方がその被限定性に於て決して眞に絶對の可能性を覆ひうるものでない以上、こゝに定立せられる判斷内容も實はいかなる積極的綜合的な證明でもなく、(さきの空間の場合とその形式的性格を同じくして)唯生に關する一つの端的な事實の指摘たるに止るのである。併し乍らこの事實たる生の最も普遍的根本的なものであり、その限り所謂先天性を之に就て云ふことの比較的最も合理的たるに庶幾いとは云へるといふべきであるが、併したとへ最高統覺に就てこそ假にかく云ひうるとしても、かかる統覺の仕方としての所謂先天的諸範疇なるものは、それらが夫々その被限定性に於てかの純粹統覺と眞に必然

の聯關に立つのではない限り、換言すれば、それら諸々の「かく統覺する」が、かの「凡そ統覺する」からして、所謂先天的に嚴密な必然性を以て導來されるのではない限り、その同様な權威を受けることは決して許されないのである。而して假にその先天的導來が嚴密な意味に於て成就すると想像しても、その際は又却つてそこには唯、それら諸形式の何れかに依つて必ず統覺されねばならぬといふことが云ひ得られるのみであつて、現在の特定の經驗に當つて正にこの形式こそその本來の統覺形式に外ならぬといふ自證は、その場合何を根據となすといふべきであらうか。全く獨立な由來をもつものとして、與へられる經驗的素材へのその適合性がそこに問題とならざるを得ないのである。――

之を要するに、凡そいかなる概念も、本來その内容を根源的に經驗に於て暗示されなければならぬといふ意味の經驗への依存乃至一種の歸納的性格といふものを、一面に於て到底缺くことができない。併しそれは云ふまでもなく、經驗の中にそのまゝ見出されるといふ意味ではあり得ない。いかなる概念の成立に當つても必ずそこにはすでに知性の或自發性の參與がなければならぬ、一種の想像力的加工が豫想されるのである。即ち知は總じて經驗に始まり乍ら經驗からのみは出て來ないものたる所以であり、一般に所謂歸納なるもの、綜合性（特殊的有限から一般的無限へは常に一種の飛躍である）の由來する所がこれである。所謂「自然の齊一性」の命題（それは所謂「神の誠實」の別の表現に過ぎない）は、かゝる綜合を形式論理的に正當化すべく、生一般に遍滿する根本的惰性が、歸納的推理の大前提として、對象的に内容化せられたものに過ぎない。之によつて得られる正當化は云ふまでもなく唯内在的のものであり、大前提そのもの、本質は根本的には唯（いはゞ惰性的依倚の意味に於ける）事實としての信賴なのであつて、この綜合的一面から見られる限り従つて知は當然根本的懷疑の纏縮を免れることができないのである。

凡そ生の經過の中にとちかく一應成立する限りの知乃至概念は、必ず一先つ定義的に自己の中に籠らうとする傾向をもつ。換言すれば、あたかも自ら不動の眞理なるかの如く、將來の無限な同様の經驗をその立場に自覺的に同化しようとする、それらを自己の限定とする普遍の自同的安定に能ふ限り止らうとする、一言で云へば演繹的態度に立つ。若しこの立場にして形式的に固執せられるならば、その限りその知は、その命題的形式に於て、永久に不動たることも強ち不可能ではない。例へば「AはBである」といふ立場が定義的に自己に立て籠る限り、もはやBならぬAに出會ふ恐れは毫も無いのである。何故ならば、この立場ではBならぬものはもはやAと呼ばないのであるから。若し他の諸規定に於てAと同様であり乍ら而もBならぬものが經驗に於て現はれるとするならば、その場合には實はその經驗が不純なのであつて、AのBなることが混入條件によつて蔽はれてゐるのであると考へるか、さうでなければAに似て非なるA'が見出されたといふことになる。何れにしても「AはBである」といふ命題は、形式的にはあくまで自己を維持し得る。即ち、凡そ知が具體的にはその確實意識に即して必ず多かれ少かれその一面としてもつところの傾向であり、例へばかの數學的判斷が、經驗によつては到底その主語的前提を嚴密には現實化され得ないものとして、經驗の檢察をその資格無きものとなし、若し經驗との不一致があれば原因は之を經驗の不純性に歸することに依つて、所謂超經驗的妥當性を保持すると考へられるのも、實はこの立場に立つのである。そこに得られる超經驗的安定は經驗を眞に自己の中に包み盡すが故の夫でなく、却つて暗示の根源たる原始經驗から定義的に自己に籠りつゝ、遊離するが故にのみ得られる夫に過ぎない。その定義的内在の立場に立つて經驗の不純性と考へられるものは、經驗の側から云へば却つてその歴史的な高次の具體性、換言すればその條件の理論的分析的に到底網羅し盡し難い複合性に外なら

知はかくて形式的にはいつでも永久的に確立しうる可能性を一面にもつとは云へ、それは單に内在的にてあり、他面に於て常により適切な定義的措定の可能が拒まるべきでない以上、換言すれば、例へば「AはBである」は單獨抽象的にこそ永久的にも安定しうるが、或知的體系中の構成要素としてはAはむしろB'であるとした方が該體系の形式的な整合性の上からも、又實際に種々の場合への適用に於て、その直接的な不妥當性をば原因を不純な混入條件に歸することに依つて解消する手續が全體的に簡單であることからしても、一層眞實であると考へらるべきに至る可能性が十分ある以上、生の現實への接觸に於けるその内容の修正が斷えず反面に期待されなければならず、知の不斷に進歩する融通性が阻碍せらるべきでない限り、その意味に於ける自己の暫定的階梯性の意識、換言すれば或形式による生の試行的把握たることの意識は、あくまで没却されてならぬのである。實際に於ては、經驗的現實に近く具體的な知に於ける程その意識は顯著であり、科學的法則から原則、數學を経て更には所謂自明の公理、例へば「同じきものに等しきものは相等し」の如きものから「全體は部分より大なり」の如きに至つて、その意識の稀薄化が自然的に極まるのである。それも所謂自明の命題は、一見明瞭なる如く、實は夫々或概念の定義と云つてよいものである。従つてこれに内在的には勿論絶対に安定的であり、之に背反するいかなる事態も現はれやうはないが、單にそれのみに止らず、これらの場合にはそこに同時に、極めて高度の超越的確實性をも亦、常にその反面に伴ふのである。單に形式的にならば永久的安定は全く任意の概念に就て可能であるが、併しその場合にはいかにもそれに背反する事實は現はれ得ないにしても、それに相應する事實も亦竟に現はれないかも知れない(例へば「天馬は翼をもつ」の如く)。所謂永久眞理

なるものが、等しく定義的内在の立場とは云へ、かゝる任意的架空の場合と異つて、ともかく永久真理の名を稱し得る所以は、それがあくまで生の現實への接觸と凝視とに於て内容の暗示をそこに仰ぎつゝ成立したものととして、その定義的内容が常に所謂「存在」することを措いて無い。換言すれば、その述語的歸結を眞に必然的ならしめるべく嚴密な十全さに於てこそ不可能とは云へ、高度に近似的にならばいつでも經驗的現實の中に主語的前提が見出され得、従つてものゝ一面から直ちに他面を推さしめる意味での認識の機能と效用とを十分備へてゐる點である。即ち所謂永久真理とは、不自然な形式的固執ならぬ意味に於て、自然的に成立した定義的自同的内在の立場に外ならぬ。併しともかく内在の立場である以上、その反面に、根本的な偶然性の纏綿に於て、到底高度の蓋然性以上に出ることのできぬ超越的一面をもつといふ原理の本質は、經驗的現實に近く一層具體的な他の諸概念の場合に於けると毫も異なる所あるべきでない。眞に批判的態度に徹する限り、いかに所謂永久真理的な判斷内容と雖も、根本的に云つて、畢竟生が自己に就て見出した事實たることを否むことができぬ。絶對的積極性の意味に於けるその根本的な事實性に於て、原理上その反對の可能を絶對に撥無し得る形式なるものは現實には存しない。現在のいかなる理念的形相的な明證と雖も、その眞の持續的安定には尙所謂「神の誠實」を必要とするといふべきであり、根本的に非合理性の抜き難い歴史的實質的な時間に関し、その將來を嚴密に約束することは到底いかなる概念にも許されないのである。而も省みれば、現にかくあることから未來も亦必然にかくあるべしとする保證は竟に得られないと考へる根據たる、可能性一般の本性に關するかゝる知自身に就ても亦、その事は同様云ひ得られるのでなければならぬ。絶對可能性の見地を含む反省に對して、知の根柢はどこまでも崩れてゆく。措定作用的な立場への反省に於て知が知として限定的に意識される限

り、根本的懷疑は竟に之を脱することができない。而も懷疑そのものと雖も理由をもつ限りその根據が疑はれ得、かくて涯しはない。生の形相の根本的なものに就ては、之が批判のあらゆる試みが却つて常に之を豫想するといふ免れざる循環があると云へるが、これとても唯一切が現にありかくある限り、且知らうとする意欲の保持せられる限りといふ外ない。眞の不可疑的安定は、かくて反省に對しては無限に遠ざかりゆくが、而も凡そ知的に何らか積極的な歩みのある所、知性は必ず一面に於て直ちに之を豫想してゐなければならぬ。いかなる知的營爲ともかく一應の足場を缺くことはできないのである。眞理は絶對的に相對的であるが、又相對的に絶對的である、兩面の交互顛倒がその具體的な眞相なのである。知は一面に於て、自己の一旦確立した相に断えず定義的に安定しようとし乍ら、而もかゝる安定の内在性の意識、換言すれば知としての自己の試行的暫定性の意識に於て、それに固執することをなさず、却つてかゝる知の主語的な極たる眞の有即ち生の現實なる原經驗への不斷の接觸と顧慮（例へば物理學的概念に關しては「測定」の如く）とに於て、断えず一層適切な綜合と歸納との實現を期待し追求しゆくのでなければならぬ。自同的安定への傾向を保持しつつ、その演繹的態度に於ける生の現實との對質に於て、自己の眞理性を断えず試練してゆくといふのが、一言で云へば所謂「假説」（概念の所謂先天性經驗性は實は根本的に解されたる「假説」に於て相表裏する二面に過ぎない）を立てつゝ、ゆくといふのが、知の具體的な態度に外ならぬ、知るものは具體的には疑ふものである。反省の自由な轉回性が怠惰乃至怒傷の一方性に陥る所にのみ、疑ひはその消極的一面に偏しては懷疑のための懷疑となり、その反對の偏倚に於て獨斷となり狂信ともなる、何れも断えず知らうとすることゝしての疑ひの抽象態に過ぎないのである。

對象的に疑へないものは永久に把握の課題であり、知性は無限に自己を顛倒する。

知はその確實意識に於て、前提された主語的な知から述語的な歸結的知への分析的一面と、眞の有への關係に於ける主語知そのもの、抑、の成立といふ綜合的一面とを、具體的には常に表裏せしめてゐるのである限り、前の一面に即して自同的確實意識に於ける必然的な知の現存を承認し當然知性自身による主語的絶對措定を考へる立場と、後の一面に即して知性からあくまで獨立な有の先行とそれへ模索的に追隨する知の免れ難い不十全性とを考へる立場とは、當然互に二律背反的な關係に於て立つのでなければならぬ。

一面に於て確かに知には何らかの意味に於て所謂模寫の意識を缺くことができない。それは凡そ何か知らるべきものを先立てつゝ、その真相を模索し行くといふ知一般の本來的な意識と切り離せぬものであり、若し假に知に模寫的な意義をあくまで拒むとするならば、根源的な觸發の意識を一方に否定し難い限り、かゝる有への知の關係は曖昧となることを免れず、知がともかく現實の生に適合し得るといふことに對しては、それは單なる偶然であると云ふからざれば形而上學的に一種の所謂「豫定調和」の如きものが考へられる外ない。而も又他面に於て知をかく先行する有への模寫的模索的な追隨と考へる限り、知の免れ難い不十全性の意識に於て根本的に懷疑を脱することが不可能である。加之、模寫を云ふからには模寫の原像たるべき原經驗の先行が考へられなければならぬが、模寫的な知に對しその基準として對比せらるべきものはすでにそれ自身或知でなければならず、かゝる知そのものは然らば抑、いかにし

て成立つかと反省してゆけば、結局もはや何か先立つ有への模寫的な知でなく、却つて自ら直ちに有である如き知が主語的究極的に考へられなければならぬ。併し知と有とそこに相即する直接的な生には本來「かくあり」としての内容的な知は尙存し得ないことを考へれば、その忠實な寫像たる意識に於て何らかの「かくあり」を絶對的に確信する知の立場は、すでに實は或積極的斷定に於ける知性の絶對的綜合指定を行じてゐるのに外ならぬ。或は別の云ひ方にすれば、所謂模寫的な知にその基準として主語的に豫想されるものが、凡そ何らか「かくあり」として内容的に思惟し得られ審視し得られるものである限り、それはすでに一個の知として、その成立そのものが却つて又或原像を豫想すると云はねばならず、かくて涯しが無い以上、結局所謂模寫なるものはもはや原物が之と内容的に對比し得べく別に知られてある意味の夫でなく、却つて原物はいはゞ知性への一瞬の接觸の後全く自己を隠し去り、その正體は唯、被觸發の意識に於てそれに續くもの乃至殘されたものといふ意味をもつところの、すでに何らか内容的な現在の知の立場から、溯行的に推定せられる外なきものと考へられなければならぬ。いかに觸發そのものに近接するにせよ、凡そ「かくあり」として見詰め得られ考へ得られる限りのものは、すべて唯すでに殘されたものたるに外ならぬのである。その一種の斷層感は、譬へて云へば、自由物體に於て一瞬の衝擊が無限の惰性的直線運動となつて殘るにも似ると云ふべきなのである。所謂模寫はかくて、その存立の機縁をこそ何かに仰け、内容的な規定に關する限り、却つて専ら唯自己に由るものとして、もはや本來の模寫たる意味を失ひ、却つて知性の積極的指定を考へる立場へおのづから移行してゐるのでなければならぬ。而も又この立場に立つては、知の内面的な明證意識の説明こそ容易であるが、一方に根源的な觸發の意識が否定できない以上、かゝる有への知の關係は曖昧を免れぬものとなり、かくて無限に顛倒する

のである。

かゝる一種の窮地を脱するには、知は觸發者の内的本質をそのまゝ、映し取らうとする意味で模寫なのでもなく、又觸發者の内的本質とは全くかゝりなき知性の絶對肯定たる意味で創作なのでもなく、實は觸發そのものに於て極微的に暗示されてゐるものゝ、いはゞ積分的有限量化的の意味に於ける、顯現であるとか考へられる外ない。併し所謂潜在顯現の概念は、上にも觸れた如く、異なるものゝ同一として、分析的思惟にとつては一種の矛盾を含む綜合であつて、實はそれ故にこそ能くこゝに映寫(同一)と創作(相異)とを中間的に調停する役割を勤め得るのであり、主語的起源に於ける知的内容の極微的含蓄としての一種の極限概念に於て、矛盾は實は唯無限の彼方へ押し遣られることに依つて一應隱蔽されてゐるのに過ぎぬのである。知の成立に缺き難い歸納なるものが、その模寫性の反面に必ず知性の積極的加工に基く一種の綜合を含まねばならぬとして、そこに所謂想像力のはたらきが考へられるが、その所謂想像なるものがやはり直接的映寫とその延長的超出として、實は調停すべき對立をそのまゝ自己の中に含んでゐるのであるのも同じ事情である。想像力とは、知の含む根本的綜合性に對應する知力的な一種の極限概念といふべきもの、いはゞ模寫たるべし創作たるべしといふ知の二律背反の根本矛盾が知力的に凝つて所謂想像となると云つてよいものである。當然それは知力的諸契機の中最も具體的根柢的であり、所謂理性とはその思惟的な反映に外ならぬのである。ともかく何れの場合にも極限概念的な調停は、たとへ悟性的にその假相は生じ得ても、實は矛盾の眞の解消たるものでなく、却つて矛盾はそこにそのまゝ、その抜き難い根本性に於て示されてゐるのであり、この事は可能的な疑へぬものとしての所謂「所與」や「物自體」の概念に就ても亦、明らかに看取し得られる所である。

知に對する所與なるものは抑、概念上一個の矛盾であり、知に對する所與といふからにはそれ自身まだ知られたものであつてはならず、而も知にとつての所與ならばともかく知と關係しなければならぬが、いかなる意味に於ても知られることなくしていかにして知と關係し知を促しうるであらうか。與へられるとは課せられることである、知らるべく未だ知られざるもの、問題として懸かるものであると云ふとしても矛盾は解消するのではなく、却つてそれ自身矛盾の表現である。問題も知性にとつての問題たる以上、すでにかゝるものとして少くも意識されてゐなければならぬ。即ちすでに或意味に於て知性の參與の上に成立つてなければならぬ。問題が問題として所與たり得るのは唯限定せられた知性的契機に對してのみであつて(例へば狹義の思惟に對して感覺の如く)、知一般に對してはあり得ない。知一般にとつては、問題の問題たること自身、すでに問題ならぬ一個の知であると云はねばならぬ。背理に似るが、それにとつては知ならぬものも知である。異物と考へられるものは却つてその一様態に過ぎぬ。外も實は内である。所謂「窓をもたぬ」といふべきものである。

總じて確實意識の根源は自己への逢着にあり、判斷に於て明證乃至必然の意識のある所、主語的なるものは根柢に於て知性自身の措定にかゝるものでなければならぬといふ事態が、現實の知に於ける確實意識の一面に執する立場(即ちその假言性内在性への反省不十分にして所謂綜合的必然知が現存するとなす立場)に於て徹底せしめられる限り、當然知への所與は根本的に否定せられるに至るべきである。明證的必然的確實意識にして同時に斷言的超越的な意味をもつ所、知性による主語措定は當然その絶對性に於て直ちに有の生産であるべきであり、凡そ明證知の對象たる限りのいかなる内容も根本的に我の絶對措定に俟たぬはなく、而も生のいかなる内容も何らかの面に於て(少く

も最も直接的底面的なその純性質的存立態に於て）明證知の對象たり得ぬはないのである（例へば上にも、問題は問題としてすでに確たる一個の知であると云はれた如く）。普通に知への所與と云へば直ちに思ひ浮べられる感覺の如きも、「かくあり」としてのその内面的な自知に於ける絶對確實意識は、實は知性が自ら先づ主語的に「かゝるもの」と絶對的に措定してゐてのみ可能な述語的意識たるのでなければならぬ。端的に「あるもの」としての主語的な促しへの「かくあり」としての述語附けたる限り、知は全く一個の綜合であり、唯却つて自ら先づ「かゝるもの」としての主語的者の絶對措定を行じてゐてのみ、述語的な性質的自覺ははじめて正當に自同的確實意識を伴ひうべきである。

所謂端的な有そのもの、或は感覺に於ける觸發の意識（即ち我の受動乃至被規定の意識）そのもの、如きと雖も亦同様であつて、それらがそれらたることの内面的に不可疑の自證は、先づ自らによる主語的なそれらの絶對措定なしにはあり得ないのである。かく云ふは決して論理的形式的な拘泥でなく、明證乃至不可疑の意識のある所實は常に自己が自己と逢着面接してゐるのである事態は、自然的經驗的意識の底に徹する限りの反省に於ては何時たりとも容易に自證し得られる所である。

併し又反面から云へば、いかなる知的措定に於ても知性は根源的に被觸發の意識を呑むことができぬ。被觸發の意識が被觸發の意識たり、端的な有が端的な有たるのも、實はすでに夫々の範疇に於ける知性の措定によると云ふならば、それらの範疇は然らばその單なる可能態を出て現にこゝにかくはたらき始めた機縁、換言すればその生に於ける絶對的位置の限定といふべきものをどこに得るのであるか。之を範疇的なるもの自身の絶對自由な自己限定と云ふとしても、全く由る所無きかゝる自由は却つて全き非合理的被規定の別名に過ぎぬと云へるのである。何か「あるも

の」に就てその何であるかを規定すべき範疇的なるものにとつて、その主語的な何かの抑々あること自體即ちその端的な「あり」(これは畢竟「こゝ」にはたらく範疇のこのはたらくに於て抑々あること自體でもある)は、常に唯絶對に豫想されてある外なく、もはや決してその規定の内容をなすものではあり得ない。範疇的たることは述語的たることであり、主語的な有があくまでそれに先行するものでなければならぬ。而してその限り、知は之に追隨するものとして、到底それとの十全的な一致は得られない。先行する主語的者との或距離の意識無しには、凡そ述語的な知の意識は成立たぬ。結局この立場では知に關する懷疑を根本的には脱し得ないのであり、單に假言的内在的ならぬ眞の不可疑的客觀知が若し現にあるとするならば、その可能は(實在論的といふべき)この立場からは不可解となる外ないのである。

前の觀念論的立場からはその説明は一應容易である。否、かの立場は元來客觀的必然知の現存の承認を前提とし、その事實の可能を説明すべく知性自身による主語的措定が想定せられたのであり、知性自身による主語的な有の絶對措定が承認せられる限り、客觀的にして必然的な述語知の可能なのは當然である。それは一種の循環論に過ぎない。知らるべきものを自ら根元的に措定するのである限り、知性は確實知に於て當然對象そのもの、意味の有に到達しうるものでなければならぬ。意識的に主觀的なるもののみ、之に對していはゞ非實在的となる。この立場にも真理非眞理の區別はなければならぬが、そこに眞理性の基準たるべきものは、知から獨立に之を超越する非我的な有ではなく、却つて知性自身に於ける自我的な規範意識といふ如きものでなければならぬ。かゝる所謂當爲への忠實さ、それを基準としての透徹性の差に於てのみ知の確實性の差が成立つ。眞に明證的な知の内容はその絶對性に於て直ちに有といふべきものであり、明證性の不足に於てのみ知の相對性主觀性が成立つのである。

かくてその知の自同的確實意識に即しては、凡そ生のいかなる内容も我の絶對措定に俟たざるはないとして、かく若し一切が根柢的に唯我の措定に於て成るのであるとするならば、この世界はともかく自身完結した一つの絶對的な世界であつて、之を現象とする實在界といふ如きもの、別にあるべき道理はない。併しかくの如き我の絶對化は、我に於て自己高揚感の反面には却つて一種孤立の寂寥あることを免れず、知性自身にも侵透するいはゞ歸依性一般といふべきもの、不滿に於て、我の人格的全體はこゝに安堵しかねることを暫く問題外とするも、單に理論的に云ふもそれは唯一方的に固執せられうるのみであつて、直ちに全く同格の權威を以てする實在論的反定立を免れない。主語的究極的な被觸發乃至被規定の意識は到底否定しおほせないのである。勿論知的措定自身の抑々あること自體乃至範疇的なはたらきの現實化の機縁そのものといふべきものとても亦、省みれば、夫々すでにかゝるものたることに於ける一種の知としては、やはりそれに即する自同的確視に於て、直ちに知性自身の絶對措定に成るものであるとも云ひ得られないことはない。併し又之に對しては省みてそのやうな知的措定自身の抑々あること自體の由來が再び問はるべきであり、かくて涯しは無いのである。

所謂物自體の概念はやはり、知性にとつて免れぬかくの如き窮地を反映するのである。それは一方あくまで我と獨立な實在として我の絶對化を牽制する。真理の基準として何らか知から獨立な有を先立てようとする知性自身の實在論的要求乃至一種の歸依性といふべきものはこれでもかく満たされたとして、而も他方に知の絶對的確實意識が救はれねばならぬ。即ち知性自身による絶對措定が主語的に想定せられなければならぬ。之と物自體の想定とはいかにして調和しうるか。即ち物自體は一面に於て知の素材的根源として所謂旨目的内容を供給するものであり、之にいは

光を與へ知となすところのその形成原理は却つて全く知性自身の側に由來する。知的世界はその形式に關し根本的に現象性を免れぬと共に、内容が形式を得てのみ成る知に就ては、即ち與へられる素材の範疇的攝取に於てはじめて知的内容として措定せられる主語的者に就ては、それはもはや單に「あるもの」ならぬ「何かであるもの」として、すでに必ず内容的な述語的者も之に對して正當に必然的自明性を以て歸屬せしめられうる筈である、即ち知の自同的絕對確實意識が可能である。かくて一方生一般従つて又知性自身の實在論的要求が満たされると共に、他方に於て知の自律性即ち知性の主語措定性に基く述語的確實知の可能の説明されると考へられる。

併し一見矛盾を調停するかに見える物自體の概念は、仔細に見れば、實は却つて調停すべき矛盾そのものゝ體現に外ならぬのである。一方知からあくまで獨立たるべきであり乍ら、而も知を促すものとしてはたらきうるには既に知られてゐなければならず、それは知有相即し端的に有る意味に於て生きられてあるといふならば、かくの如きものを主語として、いかにして内容的な述語知が正當に之と自同意識に於て連結しうるか。その可能の説明せられるためには、主語知はすでに何らか内容的な範疇的形成に於て知性自身による積極的措定でなければならぬとして、然らばかゝる主語知そのものゝ成立に於て（述語的確實意識が單に内在的たるに止るべきでない限り當然主語知そのものゝ吟味が要求されねばならぬ）、いかにして主觀的形式は、互に獨立な由來をもつに拘らず、能くその素材的なるものに對してのその適合性を得るのであるか。豫定調和といふ如き考を容れぬ限り、そこには唯知性の積極的綜合的な斷定があるのみと云はねばならず、知は超越的には當然蓋然知以上に出ることができない筈である。即ち知的世界はその意味に於て所謂現象性を到底免れぬと云はれ得るのである。物自體の實在性が強調せられる限り、知の絕對確實性

は到底得られない。一見得られるかに見えるのは、實は唯内在的のものに過ぎない。この事は裏面から云へば、知に關しその眞の意味の斷言的確實性を救ふためには、所謂物自體の實在性は放棄せられ、却つてそれは唯、全き主觀的生產の意味に於て、根本的に觀念的なものとならねばならぬといふことであるのは云ふまでもない。

歴史的な物自體の概念が種々の不透徹と齟齬を含むことは夙に指摘される所であるが、右の如き事態こそ正にその混亂の眞の根源に外ならず、たとへいに前後一貫的に規定されたとして、畢竟それは自身一個の矛盾的概念たる根本性格を脱し得ないのである。單に形式的に云ふも、知られざるものとして知られて居り到達し難いものとして到達されてゐる。即ち一般に極限的なるものゝ矛盾的性格であり、一見觀念的立場と實在論的立場とを調停するかに見える「物自體の概念(即ちそこに反映せられる先驗論理的立場)は、實は調停すべき矛盾をそのまま、自己の中へ取入れてゐるに過ぎぬのである。」

十一

對象的且内容的に疑へないものたるべきものとしての所謂實在、即ち判斷に於ける主語的なるものゝ極といふべきものゝ含む以上の如き矛盾の本性を見極めるため、我々は更にそれをそのより一般的な相に於て見ることを試みよう。

知の目標たる主語的な極は生に於ける一つの始まりであるが、凡そ始まりなるものは概念上一個の矛盾である。嚴密に始まりそのものを考へるに、それはともかく無ではない。無は始まりに先立つのであつて始まりではない。然ら

ば有であるか。併し有は之を仔細に考へて見るに、何らかともかくすでに現にあるものとして、嚴密には實はすでに始まりしものなのであつて、始まりそのものではない。凡そ夫々その種に於てすでに始まりを通過しつたものに就てのみ、知性は例へば「有」として又「始まり」として之を範疇的意識的に捉へることが可能である。當體的な眞の始まりそのものは、あらゆる述語的把握に對する主語的方向の極である。有でなく無でない、反面から云へば有であり無である——これが始まりの思惟的本性である。有無何れかへの自同的固定を目指す限りの知性は、始まりそのものへのその把握的努力に於て、永久に自己を顛倒せざるを得ないのである。

併し思惟的にいかに矛盾的たるにせよ、現實の生は始まりの無限の重疊たることは否めない。始まり乃至一一般に境を含まない現實はない。知性は單に、有に立つては無ならぬものとして唯有を、無に立つては又唯有ならぬものとして無を定立するのみのものではあり得ない。知性は、有無何れかへの固定の意味に於て所謂悟性的思惟的にこそ、始まりそのものを竟に捉へ得ないとは云へ、而もどこかに何らかの意味に於てそれを捉へてゐるのでなければ、それが捉へられぬといふ意識もあり得ない、有無兩者間の反轉に於ける無限の思惟的努力もあり得ないのである。知的に有無の境が成立つには、有から無乃至無から有への移行に於て、現に立つ所たる有乃至無と共に、すでに去られて現在ならぬ無乃至有をも亦、同時に併せ保つ所の知性的契機がなければならぬ。このものは有無間の移行に於て兩者を同時的現在的に併せ捉へることにより、有に立つてはもはや無でなく無に立つては又すでに有でないことに固執する限りの知性的契機に對しては到底存立し難いものたる、有無の境をはじめて存立せしめるべきである。一般に現在ならぬもの、觀念的現在化は想像とよばれるが、過ぎ去れる經驗的現實の記憶的再現に基く經驗的な想像でなく、却つてそこ

に豫想せられる經驗的現實そのものをば、何らかの意味の境を含むものとしてのその綜合性に於ては、はじめて存立せしめるといふべき如上の意味の過去保持は、常に先驗的想像と呼ぶべきであり、知性の最根柢的具體的な契機として所謂先驗的想像力なるもの、所爲と見られるのである。

一般に直觀的なるものは必ず何らかの意味に於て他者との接觸を含む。假に或性質的同一者を單獨抽象的に考へるとしても、少くもすでに意識に於ける或る原始的延長をもたねばならぬが、凡そ延長一般が境を含むこと明白であり、任意の一點に對し自同的に固定せられるいかなる次の一點もすでに原點への他者である。その(廣義の)位置に於て異らねばならぬ。換言すれば、原點との間に何らかの意味の或距離を介在せしめねばならぬ。悟性的思惟にとつてはすでにいはゞ我を忘れた飛躍の後の一定立といふ外なく、その自己を固定的に見出して立つ所は必ず一點か若しくはすでに中間者を超えての他の點であり、中間者そのものたる境は永久にその一方的に固定的な把握を逃れぬのである。一者か他者かの排中の立場に立つ思惟にとつて、その本來的な對象は當然いはゞ點的であり、相連結して線をなすといふことがない。線をなすには他點への移行に於て一點の同時的保持がなければならぬ。それによつて一點であると共に他點でもあるもの(即ち境)が成立たねばならぬ(連續とは境から成るといふべきものである)。即ち或意味に於て排中律の否定に外ならず、悟性的思惟には一個の矛盾である外ない(こゝに「或意味に於て」といふは、實は兩措定の間には媒介的な立場の一轉たる反省が介入してゐるのであつて決して平板的同等的な撞着ではないからである。唯反省的移行の急速の交替に於ける想像力的幻惑の成立つ所兩措定が直ちに直接的相即と見られる傾向をもつ上に、表現の簡潔と強勁への無意識的ないはゞ修辭學的本能といふべきものがこの媒介的な介入者を表現の上で省略させて

るに止る、即ち一般に所謂辯證法的事態の表現に通じて云へることである）、而もこの意味の中間者が抑、先づ存立

することなしには、互に位置を異にする意味のその對立に於ける一點と他點とも亦、存立し得ないことは明白である。即ち悟性的思惟は常に唯、いはゞ事後的追隨的に、想像力的綜合措定の跡を（意識的自覺的な連續化の意味に於て）所謂合理化するための、漙しなき努力をなしうるのみであり、之が竟に不可能たることの意識に於て、而もあくまで直觀的飛躍を思惟的に連續化すべき己が本性の要求（それは思惟にとつて、いはゞ忘我的過失の償ひとも云ふべく、失はれた自己回復の努力なのであつて、生に於ける根本的自己保持的傾動の思惟的な表出と云つてよい）に於て、この窮地を救ふべく思惟にとつて止むなき手段が即ち所謂極限の概念に外ならぬ。併し之によつて事態は思惟的に合理化し盡されるのでなく、實は合理化的努力の極まる所一種の絶體絶命感に於ける或非合理的飛躍に過ぎぬものとして、それ自身はゞ斷絶的連續乃至連續的斷絶とも云ふべき一個の矛盾に外ならず、調停せらるべき矛盾は唯無限の概念によつて一應目を逸らされるに過ぎぬ。實はその無限の概念に於ては努力の永久性換言すれば根本的解決の不可能性が意味せられてゐるのであり、思惟が瞳を之に向け正面的な凝視に於て之を把握しようとする限り、それはあくまで唯所謂理念的對象として、思惟的なかゝる努力を限り無く要求するものとして立ち現はれざるを得ない。矛盾は解かれるのでなく唯無限の彼方へ押し遣られるのである、無限の概念がいはゞ撞着の緩衝物となるのである。

上に始まり乃至曉が想像力的根本綜合に於て成ると云はれたのも、省みれば實は之によつて矛盾が消えるのではなく、却つて所謂想像力なるものがそれ自身一個の矛盾を含まざるを得ない。即ち、必ず何らかの意味の曉を含むものとしてのその綜合性に於て、直觀が當然豫想せざるを得ないところの想像力的綜合は、それによつて綜合せらるべき

項としての眞に現在なるもの及びこの現在に保持せらるべき過ぎ去れるもの、二者に於て、却つて自らすでに或直觀を豫想しなければならぬ。綜合は直觀を豫想し直觀はすでに綜合を含まねばならぬといふこの事態は、述語的把握には主語的なるものが先立たねばならぬが主語的なるもの自身すでに述語的規定を暗に含まねばならぬといふ嘗ての事態と實は同根である。一般に境の問題(それは古典的には所謂アキレスと龜との問題として現はれたのである)の形を變へた現はれに過ぎない。所謂想像力なるものはそれ自身、一般に現在と非現在乃至同一的滯留と相異的超出、即ち更に云ひ換へて、要素と綜合、直觀と概念、感性と悟性といふ如き他者的接觸を調停し連續化すべき、知性的中間者(境)に外ならぬ。いはゞその無限の速度に於て直觀と直ちに連續する(或は直觀をそのまゝ延長する)反省とも云ふべき一種の極限概念に外ならぬのである。

始まり乃至更に一般的に境はかくて思惟的に一種の抜き難い矛盾を含み、自同的凝視と固定の意味のその把握をあぐまで拒むものなのではあるが、併しそれにも拘らず、上にも述べた如く、却つて何らかの意味に於てすでに知的に捉へられてゐるのでなければ、凡そかゝる否定態に於て思惟的追求の目標たることもあり得ない筈である。全く外的のものには、かく思惟を促すといふことはあり得ない。一者よりするも他者よりするも境が捉へ難いと云ふが、實はかく一者があり他者があるといふことと自體が、抑々すでに境の存立を豫想してゐるのである。境が一者と他者とをあらしめるのである。先立つものとしての無よりするも續くものとしての有よりするも始まりそのものは捉へ難いが、實はその意味の相關的な有無なるものが抑々始まりあることなしにはあり得ない。始まり乃至境はどこかに直ちに捉へられてゐなければならぬ。それには一應所謂想像力なるものが考へられても、却つてこのもの自身一個の知力的極

限概念であつて、矛盾は依然たるのである。追求されてゐる限り、すでにどこかに捉へられ知的に存立してゐるべきに拘らず、あらゆる正面的把握の試みの空しさに於て、追求的努力の遂に窮する所、いはゞ唯齟身一回、前面に追求されてゐた目標の實は却つて直下に追求の背後乃至追求そのものであり、その眞の自己たるものが顧みられるに至らざるを得ない。相對的な有無にとつて始まりは、或は一者他者にとつて境は、實はそれら自らの直ちに據つて立つ所であり、その眞の自己なるが故にこそ、それを己が前面に對象的に捉へることが竟に不可能たるのである。所謂想像力的根本綜合なるものも、悟性的思惟にとつて、直ちに己れを裏附けるものとして、共に知性の一自己を形成するが故にこそ、それは能く後者への理念的な不斷の促しともなり得るのでなければならぬ。

、始まりそのものが有でもなく無でもあり得なかつたのは當然である。即ち却つてかゝる相對的な有無をはじめてあらしめるもの、思惟的な之が追求の有無間に於ける無限の自己顛倒といふ如き事態のそこに存立する包括的な場面そのものといふべきもの、換言すればこの世界のいはゞ絕對者たるものとして、相關的有無の如き相對的有限の規定の一切へのその全き否定的動態に於ては、それは常に絶對無とも呼ばるべきものたるが故である。對象的に前方に追求されるもの、極が實は追求の背後でありその眞の自己であることの意識は、云ひ換へれば常に個としての特種の極が實は普遍の極に連るものとしての全體者たることの意識に外ならぬ。對象的に眞に疑へぬもの、知にとつての永久の課題性は、實は常に夫々の立場に於ける全體乃至絶對者の課題性に外ならぬのである。而して全體乃至絶對者が知的に把握し了せぬは當然であつて、少くも把握そのものは把握せられるもの、中には入り得ないのである。いかなる知的規定にも到底否定たり排除たる意識は免れず、眞に徹底性を期する限りの知的努力は必然に無限的たらざるを得な

い。即ち知らるべきものとしての絶對者は、形式的には反省の無限の要求としての我の自覺として見られるのである。

總じて極限的なるものが捉へ難いといふことは、實は眞の自己が捉へ難いといふことである。捉へ得ないと云へ全く外的たるのでなく、却つてあまりに內的たるのである。直ちにそのものである意味に於ては確かに捉へられてゐるとも云はれ得乍ら、而も對象的把握の意味に於てはいかにしても常體的に之を捉へることができない。捉へられてゐながら捉へられてゐない、自己であり乍ら自己でない。或は更に、捉へられてゐないから捉へられてゐる(捉へられてゐないとして尙も把握の目標たることは全く外的なものにはあり得ないのである)、自己ならぬ故自己である(自己ならぬものとして自己に對立しうるのはかゝる對立をあらしめてゐる眞の自己による。我への對立性の意味におけるその實在性をなすものは、次元的に飛躍ある反省的立場の混淆を離れて內的直接相に徹する限り、實は我に外ならぬ)——この悟性的思惟的には全き矛盾と見えるものが、實は一般に極限的なるもの、本性である。

目標一般の根本性格とも云ふべきもの、意志的な無限の過程としての生そのもの、形式的な構造(換言すれば我のあり方に外ならぬのである)。

十二

顧みれば知の究極の目標たるものが、有たるべし知たるべし(反面から云へば知たるべからず有たるべからず)といふ矛盾を含んでゐるのは當然である。何故ならば、それは實はかゝる有と知と及びその相互の關係とをあらしめる場

面的全體といふべきもの、即ち判断に關して云へば、主語述語的相關そのものとしての繋辭的なもの、更に云ひ換へれば、個的に特殊の極として主語的前方に對象的に自己を假象せしめつゝ、實は之が述語的追求めの無限の自己顛倒的過程としての、背後的な絶對の生そのものたるが故である。主語的な前方の極は實は却つて述語的な後方の極である、絶對的には何れを先きともなし難い相互依存的循環的な兩者の關連そのものが、實は眞實にあるものである。實在は具體的には、之が知的追求めのいとなみそのものと別に離れて存立するのではない。所謂物自體なるものはむしろ知性の無限の二律背反的自己顛倒として解體せらるべきものである。

主語的な極が有たるべく知たるべしといふ所謂有と知との關係は、之を云ひ換へれば、知に即し知に於て直ちに有るものとしての眞の現在たる知るものと、之をかゝるものとして知る回顧的な知、即ちいはゞ知の知に於て直ちに有るものとの關係、一言で云へば我の自覺に於ける直觀と反省との關係に外ならぬ。自覺に於て、直觀的な眞の知るものは、知らるべく反省の目標たると共に、却つて直ちに反省の背後反省そのものである。眞の自我は反省的把握をあくまで逃れぬくものとして現はれつゝ、實はかゝる無限の過程としての自覺行そのものに外ならぬ。知的にあくまで到達し難く見えるのは却つてその知に即して直ちに生きられてあるからであり、あくまで自己ならぬと見えるものは實は具體的な眞の自己たるのである。知と有との眞の一致態は、眞の現在たる生そのものとして、知性は念々直ちにその中に住み乍ら、而も正面的な對象としては永久に之に到達することを得ない、或は永久に到達し得ない乍ら却つて直ちにそのものである。すでにそのものに即してあり、直ちにそのものたるのであるならば、之が對象的把握の無限の努力は何のためになされるのであるか。即自慈から對自慈へ、いはゞ内在的假睡を絶えず反省的に覺醒し出ようと

する自己否定的傾動は、かゝる否定的脱出がそのために且それと常に表裏してなされる、自己肯定自己還歸のいとなみと共に、正に生一般に本來的たること、抑々生なるものはいはゞ自ら緊張を生むものとして、本來かゝる振動的な不斷の動態にのみ成立つといふこと、これはもはや唯かく諦視する外なき根本的事實といふ外ない。自ら立て自ら求める、自ら課し自ら解く、否直ちに自己であり乍ら自己を求める——一般に理念の存立としてあらはれるかゝる事態こそ、生の形式的實相に外ならず、凡そ志向的生はかゝる事態に於てのみ成立つのである。具體的にあるものは常に理念的にある。形式的には我なる理念が實在である。

抑々生に於ける夫々の現在の最普遍者が常に自我である。反省的にはいかに非我的に見られるものも、それが生の現在に於ていはゞ獨占的な地位を占めその現在を充たす最普遍者たる限り、それは即ち我に外ならぬ。我とは夫々の現在の立場そのものである。到る處あると共に特定の何處にも無きものである。而してあらゆる立場そのものに共通な活動形式自覺として（所謂意志的な營爲も常に一つの自覺に外ならぬ、知と意とは常に相表裏してのみ自覺の一者となす。所謂觀察や實驗やその他あらゆる思索の場合をも含めて、廣く主語的なるものへの凝視乃至注意が、必ず同時に何らかの肉體的活動の隨件をも缺くことなき一つの意志作用たるは勿論、所謂衝動作用の如きを始めあらゆる意志的營爲なるものは、却つて常に或主語的な始發——即ち所謂目的觀念を何らかの意識度に於ていはゞその暈縁をなすものとしての或根源的觸發——への没入的な凝視に於て、外面的には直ちに肉體的活動として現はれつゝ、やがて所謂現實としての明瞭の極に於ける述語的な顯現知——かの主語的な目的の想像的潜在に對して——に達する過程に外ならぬと見ることのできるのである）常住同一的な我はものゝ最高の形式に外ならぬ。我は實在の形式、實在は内

容的に充たされた我である。生の夫々の現在に於ける最普遍的形式的なるものに對して、特殊的内容的なるものが常に非我的である。それは常に普遍者の自覺に於て自我化せらるべきものとして立ち、特殊の極が非我的な有の極である。主語的なるもの乃至始まり一般がそれであり、眞に之に没了する立場に於て、實は却つて述語的普遍的なるもの、背後たり根柢たるもの、その眞の自己である。それが生の現在を全的に占めるものたる限り、それは純粹に我であり、そこにある生は我の全く自由なはたらきとしての純粹な自覺行に外ならぬ。何らかの始まりの立場に眞に純一なる限り、所謂興へられるものは要求されるものであるとも正當に云ひ得られ、その内容的規定に關しても夫々の知的指定に即しては、唯我の積極的絶對的な行あるのみである。而も之を反省する立場への移行に於ては、却つてそれらは全く非我的なるものとして現はれねばならぬ。その抑々あること及びかくあることは全く我に由らぬといふ外ない。何らかの始まりに就て自覺すべき普遍者我は、始まりそのものから離れて別にあるのでなく、却つて常にそれに即しその中にある。こゝに自覺すべき我は、この始まりと共にこゝに始まるのである。併しこの始まりを始まりとして意識するは、實はすでにこれに純一な立場を出て之を反省する綜合的普遍的立場に立つのであり、眞にそこに没了する立場からは、それは直ちに自我そのものに外ならず、我には本來終始無く唯有るのみである。我は端的な「有り」に於て常住にあり、我の有を疑ふことも否定することも却つて直下に我の有を實證する。併し省みれば、かくの如き事態は、實は抑々我なるものがかゝる自覺に於て成立つ如きものとして、すでにこゝにあるといふ前提の上のみ成立つのである。一旦すでに我の現存の上に立つが故にのみ、我はもはやいかにしても我の外に立つことができぬ。外も實は内であり、我の無も我の有に於てのみ意味的に存立しうるのである。併しこの昭らかな我の自覺と並びに之に於

てある世界の一切とが、擧げて全く現在せぬといふことも亦可能ではないか。固より一旦我の現存の上に立つてはもはや我の始まりも終りも矛盾無しには考へられない、最も深き我は永遠の現在に立つものとして、それに現實の生死はあり得ない。併し何かを先立てる始まり何かを次がしめる終りでなく、全く前後を斷絶しての絶對的な創造絶對的な消滅といふものが可能ではないか。勿論かくの如きものは、もはや我にとつて始まりたることも終りたることもできない。かゝる絶對的斷層といふべきものは、凡そ意識の現實の對象たることができぬ。我の始まりや終りは我にとつて現實的にあることができぬ、ありうるのは唯、所謂我の無に關する（實は常に我の有に於ける或經驗に基つくところの）或有的な想像體を意味的に指示する如き、現在の生の或様態のみである。併し生じたることなし死することなしと眞の内奥に於てかく自證しうる我（この自證が情意的に空虚ならぬためには、自然的な立場で固化する世界——そこで過去が擔はれ未來が望まれ意味的な非現在へのいはゞ我の忘失がある。こゝにのみ我の生死はいはゞその實在的な姿をあらはす——がその存立の由來に於ける直接な蕩搖感に還元され、いはゞ一切が唯現在の根の上に開花するといふべき相に於て見られる立場の強調と堅持が少くも先づ要求される。即ち徹底的な觀念論的立場である）は、かく自證する如きものとしての我の抑々、こゝにあることと自體に關しては、省みてそれはもはや我に由らず、却つて唯々すでに絶對的に豫想されてあるのみといふ外ないではないか。我の有は我の自覺的措定に於て成立つのであると云ふとしても、凡そいかなる我の措定も、之によつて措定せられるもの、由來をこそ説明するであらうが、かゝる措定自身の抑々あることと自體の由來を説明しないのである。却つて常に唯之を豫想し、その上に立ち、その中にあるのみである。我の直ちに據つて立つ所その眞の奥底といふべきものは、却つて全く非我的と云へるのである。我は常住

の現在と云はれるが、かく有たる限り、絶對可能性の立場からは當然その無が考へ得らるべきであり、而してその意味の有無は、その現實性に關し、もはや全く我に由らぬのである。

何らかの始まりに即する純一な立場に於て、唯我の自由な措定あるのみと云ひうる我は、かくして自己の根柢への反省の眞の徹底に於ては、却つて俄然として或非我的な斷層に直面するの感無きを得ない、我全くこゝに規定せらるゝと感ぜざるを得ない。我はその規定に於て實は規定されてゐたのである。而も又省みれば、凡そ非我的なるものを非我的たらしめ、我の被規定を我の被規定たらしめるものは、却つて皆かゝる夫々の現在に即する我に外ならぬ。その現在に眞に純一な立場なる我の、全く積極的絶對的な措定に外ならぬ。我は却つて我の被規定を規定するのである。あらゆる超越を内在せしめる。上に所謂絶對可能性に於て我の無が考へられたが、かく我の無の可能性を考へるものも實は我を措いてあり得ない。可能性は現存を超えらるゝとも一應考へられる反面には、却つて又、いかなる可能性も唯々すでに我の現存の上に、或はその中にのみ存立し得てゐるといふ反省の可能性も亦、到底拒み難いのである。

我の規定性と被規定性とは、かくして全く相表裏し、反省による無限の反轉を免れぬ。我規定し我措定すの意識に於て合理的自我的觀念的と一應考へられる一切は、翻へせば直ちに凡そ非合理的非我的實在的であり、而も又我を要素的純一的に夫々の現在に即して考へる限り、この關係は再び全く顛倒せざるを得ない。實在論的立場と觀念論的立場とは永久に二律背反的たることを免れないのである。

知るべきものとしての眞の始まりそのものは、主語的特殊の極たると共に却つて述語的普遍の極、或は眞の自我たると共に却つて絶対の非我である。實は反省に依つて相表裏するかゝる兩面の相即が、その具體的な眞實態である。知性は先づ、その一義的決定的な内的規定に於て知と獨立に豫め存立すべき有を主語的に想定するところの、常識的並びに科學的な自然的立場に立ち、次いで、この立場が知に關する懷疑を到底脱し得ないことの反省を機縁として、豫想される主語的な有は實はその存立に關し却つて知性自身の積極的營爲を豫想するのであるといふ所謂先驗論理的立場へ移行する。前の立場は、それに於ては知るべきものとしての有が先づあつてのみ、追隨的に之を模索しその内容を展開する知はありうるといふ意味に於て、いはゞ主語を先きにする立場であり、知的營爲はすでに豫め存立する主語から述語への經過に於てのみ見られる意味に於て、分析論理的であるに對し、後の立場では、所謂有は實は却つて知に於て成立つてゐるのでなければならぬとする意味に於て、述語を先きにする立場と云ひうべく、前提される主語的なるものそのもの、知性の參與に於ける、成立の由來と經過を説くものとして、その論理は當然綜合的構成的である。

併し省みれば、主語的なるものは實は常に述語的なるものに於て意味的にその存立を得てゐるのであり、知の絶対確實意識の可能なるのは、所謂有の存立が實は知性による生産であるからであるといふことが、いかにも一方に正當に云ひ得られる反面には又、述語的なるものはその措定的なはたらきを始める機縁を然らばどこに得るかの反省に於て、眞の始まりそのものとしての己が抑々あること自體はもはや全く我に由らず、何らかの主語的者の先行はその意味に於て到底否定し難いといはねばならぬことも亦、否み難い事實たるのである。而して我の抑々あること自體の

非我性は、主語的なるもの、内的規定の二々に就ても亦、夫々の措定作用に即する我の反省に於て意識せらるべきであり、知的措定に於て存立するものは従つてその「ある」ことのみならず、その「かくある」ことに關しても全く非我的非合理とならねばならぬ。かくてこの反省に於て、後の立場は却つて又前の立場への反轉を免れぬ。實は知は、その成立に於て具體的に見られる限り、知性の積極的創造の反面に又その模寫的追隨の意味を缺き得ないといふのがその真相なのであり、かくして知性は上記二つの立場から更に轉じて、判斷に於て眞實は主語と述語の何れが絶對的に先きなのでもなく(反面から云へば主語が先きでもあり述語が先きでもある)、却つて主語と述語との相互依存的循環的な分離即結合的關係そのものとしての繫辭的全體こそ、却つて眞の具體的者となす、所謂辯證法的見地に至らねばならぬ。

知は疑へないもの、追求である。而してその所謂疑へないものとして、先づ主語的に有が考へられ、次いで述語的に知が之に代り(規範意識)、更に一轉して、知と有乃至主語的者と述語的者の無限顛倒の相關としての知的追求そのものこそ眞の絶對と考へられるに至るのである。

凡そ知性にとつて眞の問題は必ず二律背反的である。理解の究極の目的は常に或斷層の撤去、或「曉」の解消に外ならぬからである。二律背反的ならぬ限り、知はまだ問題の核心に迫つて居らぬか、若しくはそこには眞の難問は存しないかの何れかである。あらゆる眞の問題は、究極に於て辯證法的にしか處理できない。而して辯證法的にのみ解決されるといふことは、實は常識的に考へられる如き悟性的固定の意味に於ける解決の不可能性を意味する。云ひ換へれば、それは却つて唯永久の課題性の別名に過ぎないのである。解決であつて解決でない、辯證法的解決はそれ自身辯

證法的である。絶對者を目指す知性——知性は疑へないものを追求するものとして、當然絶對的なるものがその眞の究極的對象でなければならぬ、知性はその本然の傾動に沿うて當然哲學的とならねばならぬ——は永久に自己の顛倒を免れない、即ち形式的に我の自覺として見られる知性のそれが宿命である。然らばかく觀する立場そのものは如何。「凡ては流れる」となす知そのもの、立場はもはや「流れる」ことではないのではないか、併し若し然りとすれば、すでに不動なるものがあり、「凡て」が流れるのではない、即ちかの知の立場はやはり流轉を免れない。併し又然りとすれば、却つてかの知は依然正當であり、眞理として自己を確立する、この場合に限らず、凡そ全體の絶對的なるもの、之を把握しようとする知性(無限を包まうとする有限)への現はれ方は、常にかくの如くである。自己の肯定は直ちに自己の否定であり、自己の否定は直ちに自己の肯定である。滅即生、生即滅。絶對者の自覺行として見られる限りの生の形式的實相は即ちかくの如きものである。